

住居機能時における原位置、もしくはそれに近似した位置的関係を保存しており、また一括性においても信頼度の高い資料群と考えられる。しかし小破片で出土した土器については、なお検討を要する。床面直上以外の土器・土器片は、住居埋土の他に貼床内・柱穴内から出土した。

2. 遺物(Fig. 206~209, PL. 107~109)

住居に伴う土器について述べる。出土遺物はすべて弥生土器で、器種には壺(1256~1270)、甕(1271~1280)、高杯(1281~1293)、鉢(1295~1314)、手焙(1294)があり、また土製円板(1315)も出土している。土器の組成は、最終床面に確実に伴うとみられる土器に限れば、壺8点(うち1点は底部)、甕6点、高杯10点、鉢19点(うち2点は取り上げ不可)がある。

壺には広口壺・長頸壺・ミニチュア壺・台付壺がある。1256~1259は広口壺Aである。1256はやや上下に圧縮された倒卵形の体部と突出した底部を備え、口縁端部は水平にやや拡張され端面に刻目を飾る。1261~1264は長頸壺、あるいはその系統下の壺である。1260は1次住居の柱穴S P 2279から出土した長頸壺Bで、口縁が比較的短く直立する。1261は長頸壺C、1262は同じく長頸壺系統のミニチュア壺、1263・1264は広口長頸壺である。1265~1267は台付壺で、口縁部が外反する1265、短く直立する1266がある。1268~1270は壺底部である。

甕には小形から大形のものがある。口縁端部を丸くおさめる口縁h(1271・1273・1276)、端面をもつ口縁g(1277・1279)の他、口縁c(1274)・d(1278)・e(1275)がある。1279は端面に刻目を施す。口縁部は頸部から「く」の字に屈曲するものが多いが、1280は頸部のくびれが極めて緩い。底部はいずれも平底で体部は倒卵形の個体が多い。

1281・1282・1284・1285は有稜高杯である。このうち形態が安定した有稜高杯Aは1281・1282の2点である。杯部は長めの体部に短く外反する口縁をもち、脚部は中空で脚柱部から脚裾部にかけてなだらかに移行する。1284・1285は有稜高杯Bで、やはり体部は長く口縁部は短く外反する。1283・1286・1287は椀形高杯である。1286は脚柱部と脚裾部の境界が明瞭であるが、1283・1287は脚裾部に向かってなだらかにラッパ状に開く。1288の杯部形状は不明。1289~1293は高杯脚部で、脚裾部は大きく開くが、脚柱部との境界は不明瞭な個体が多いようである。いずれも中空。

1294は手焙である。覆部の開口部を含む小片で、体部に断面三角形の突帯を貼付する。小破片であることから、住居廃絶時の最終的な土器組成には含まれない可能性がある。

1295~1298・1307は小形鉢B、1308~1310は小形鉢A、1299~1301・1311は小形鉢E、1303は小形鉢Dである。1302は体部のみを残す破片であるが、小形鉢Eに属するとと思われる。1304~1306は壺の底部から転用された鉢で、破損した壺の再利用か、あるいは製作途中に転用されたものらしく、擬口縁を口縁部としている。1312は手焙類似形態の鉢Gであるが覆部が割がれた痕跡はなく、覆部はもともと存在しなかったようである。平底をもち、斜めに立ち上がる体部下半に直立する体部上半、僅かに外反気味の口縁部を備える。体部には1条の突帯を貼付け、刻目を巡らせる。1313は片口鉢であるが、片口部分が極めて小さい。1314は有孔鉢Bで、タキ成形されたやや長めの体部をもつ。

1315是有孔円板で、甕体部の破片を円形に成形し中央部に小孔を穿っている。

S A2217

1. 遺構(Fig. 210, PL. 21・24)

B-2区、C12Q U周辺に位置する方形堅穴住居である。VI層を基盤として平面プランは極めて明瞭に検出された。検出標高は7.6mである。北側でS A2216を、南側でS A2218を切って構築されているが、

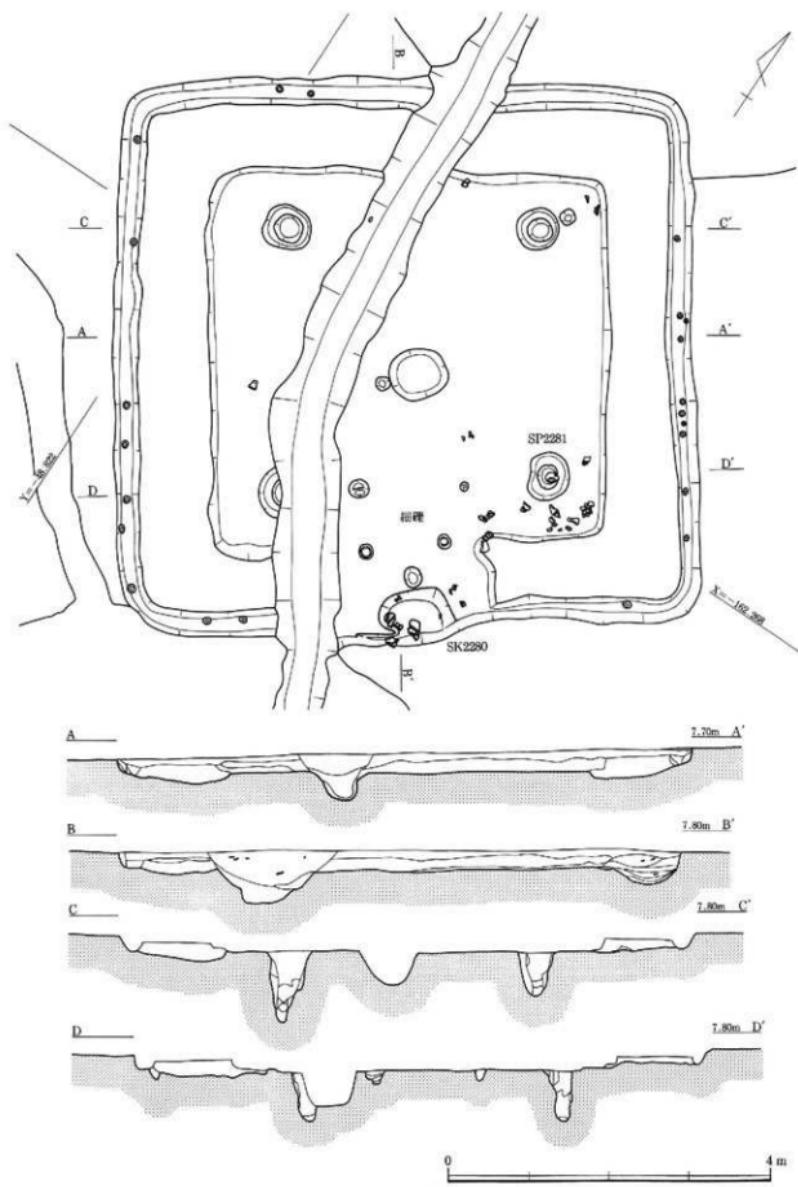


Fig. 210 S A2217平面図・断面図

住居のほぼ中央西寄りでは S D2254が床面を割って南北に走行する。主軸を N-33°-W にとり、長軸の長さは7.3m、短軸の長さは6.8mの規模で、北壁・南壁は東壁・西壁より長い。検出面から床面までの高さは約25cmである。住居の壁に沿って幅約37cm、深さ18cm前後の壁溝が巡る。壁溝の上面を検出した時点では、黄灰色(2.5Y 4/1)粘土質微砂が約5cmの幅で壁際をほぼ周全していた。断面観察ではこの微砂は垂直に溝底まで及んでおり、板壁等の痕跡の可能性が考えられる。また壁溝の底には径8cm前後の浅い小穴が多数観察されたが、その間隔は一定していない。住居の北壁と東西壁に沿って、幅93cm前後、高さ12cmの室内高床部が帯状に3方に巡り、さらに南壁には150cmの長さで東西からの張り出しがある。高床部は基盤層の削り出しだけではなく、VI層を方形に掘り窪めて掘形とした後、高床部を設定する部分を浅く掘込み、VI層に由来する黄褐色(10Y R5/8)粘土質微砂を盛土して形成されている。屋内高床部の内側の方形区画を内区、高床部から壁面までの部分を外区と仮称するが、内区の4隅には4本の主柱穴が設けられている。柱穴は掘形の径50~60cm、深さ56~93cmで、柱痕跡の径は30cmである。内区南東隅に位置する主柱穴S P2281では、床面より-24cmの柱心部分から上半部(1336)の破片が検出され(Fig. 211)、このことから住居の廃絶に際し、柱本体が抜き取られていたことが分かる。南東・南西の主柱穴を結ぶ軸線上には直径12~25cmの小ピットが2カ所穿たれている。床面は基盤層が露出しているがほぼ平坦面を成し、特に貼床などの仕様を認めることができなかった。床面中央には直径68cm前後、深さ14cmの不整円形を呈する浅い炉がある。下層に炭が堆積しており、この炭層からは若干の炭化米が検出されている。炉の南側は焼土塊状に焼け締まり赤変していた。南壁中央部には土坑S K2280が設けられている。S K2280は長径0.9m、短径0.7mの不整橢円形を呈し、深さは30cmで、これに接した南壁の中央部分は南側へ崩れたように僅かに広がっている。またこの土坑を中心として、直径数mm以下の大きさの細礫が長軸1.8m、短軸1.0mの範囲で平面的な分布をみせている。細礫は高床部の途切れる部分に薄く堆積し、またS K2280の底まで面的に連続する。土坑に接して北側には径24cm、深さ22cmの小ピットがあり、この部分には細礫が堆積していない。

遺物の出土状況は、前記したS P2281以外、内区南東隅付近の床面に若干量の破片がみられたが、外区では壁溝以外からの土器の出土をみない。特徴的なものとして、南壁中央部の細礫分布に接した北側で2点の甕が検出された。いずれもほとんど体部を失っているが口縁部は周全する。1316は口縁部が水平に床面に接した状態で検出された。また1316から東側へ約1mの位置にある1317は口縁部から肩部までの破片で、口縁部を上に向けていた。その他、S K2280の底から土器片が出土した。

2. 遺物(Fig. 212・213, PL. 111)

全体的に出土遺物量は多くない。1316~1336は床面直上、もしくは住居内諸施設から出土した土器で

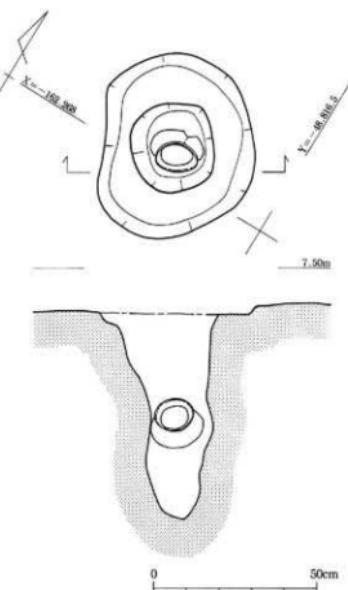


Fig. 211 S P2281遺物出土状況図

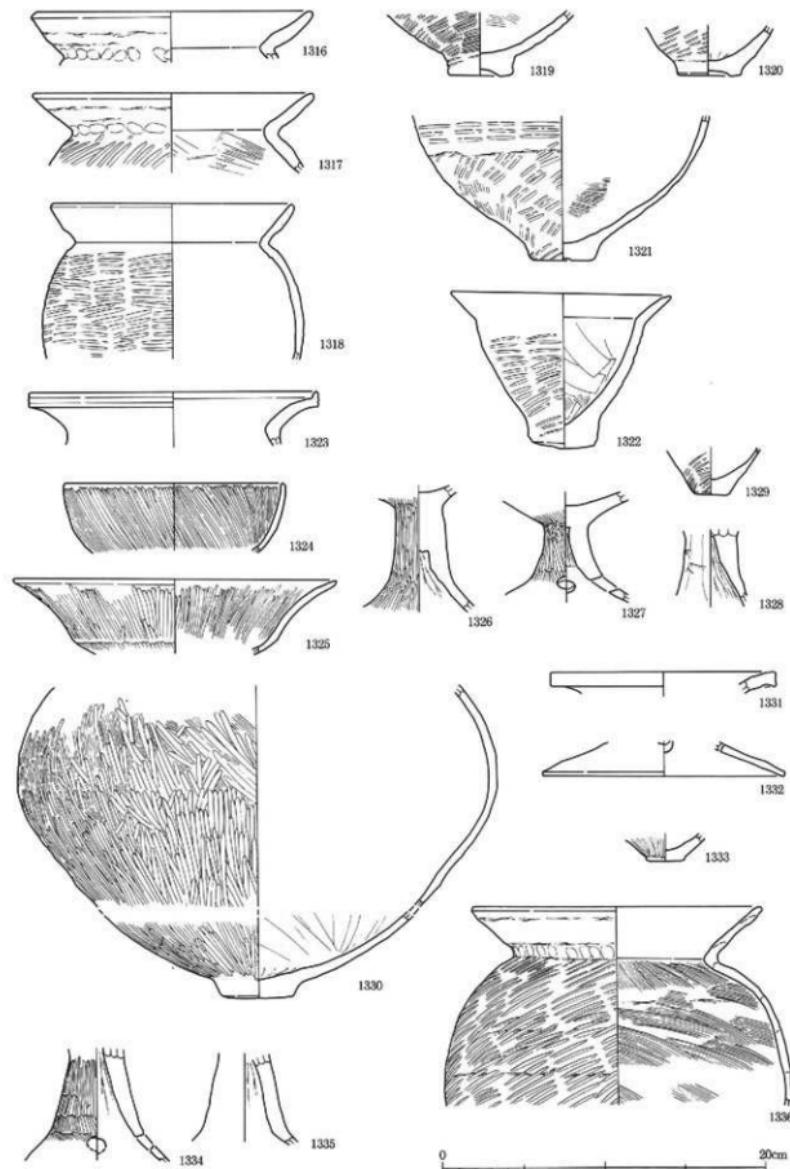


Fig. 212 S A2217出土遺物実測図(1)

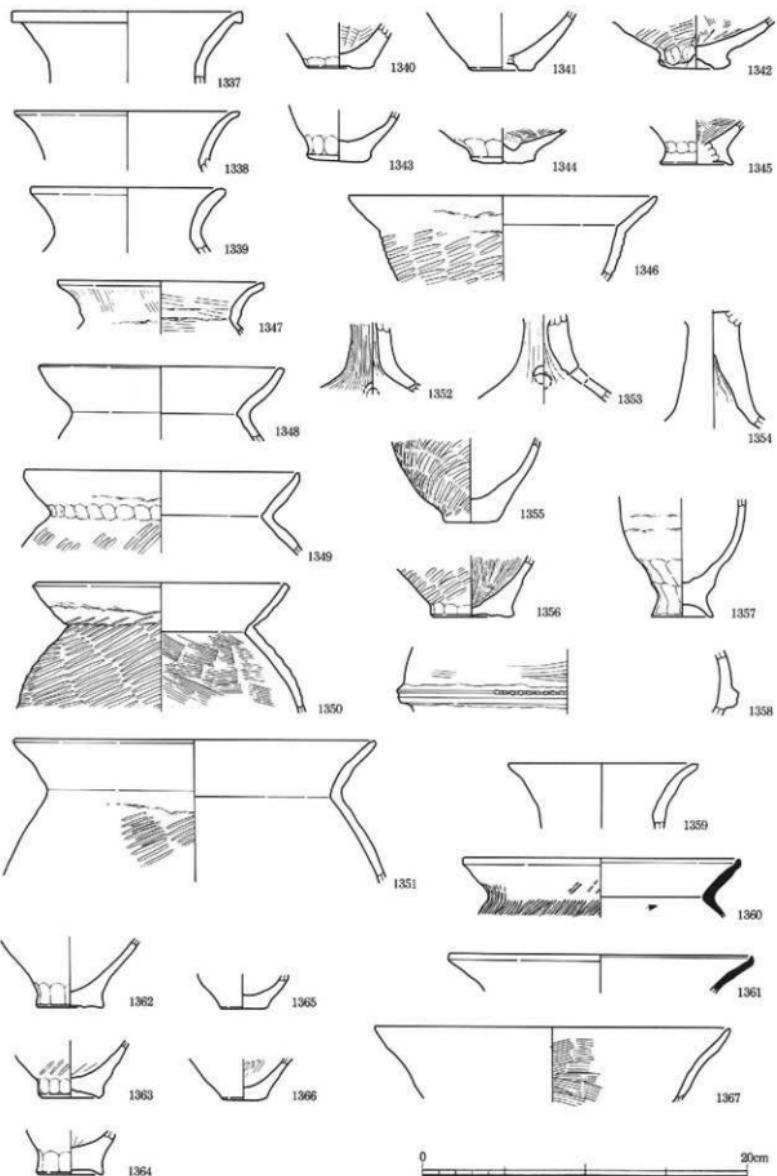


Fig. 213 S A 2217出土遺物実測図(2)

ある。多くは住居廃絶時に近い時期の土器組成の一部を示すと考えられるが、高床部盛土から検出された高杯1334・1335はその設置時に伴う土器である。その他1324～1327・1329・1330はS K2280, 1331・1332は壁溝から出土した。

1316～1321・1336は弥生形甕である。口縁部を残すものでは、いずれも端部が丸くおさめられ、また体部は球形に近いようである。1316・1317・1336は頸部外面に指頭痕、口縁部外面に接合痕が残る。

1322は小形鉢E、1329は小形鉢底部である。

有棱高杯Aの1325は口縁部が外反して長く延びる。1324は楕円高杯の口縁部である。1326～1328は脚部で、多くは中空で脚柱部と脚据部の境界がやや曖昧である。

1330は口縁部を失った甕の破片で、玉葱状の体部と突出した平底をもつ。外面は斜方向ハケのちミガキA。1323は広口壺の口縁部かと思われる。

1337～1358は内区の埋土に包含されていた土器で、層位的には床面に接近している。1337～1339はいずれも外反する口縁部をもつ広口壺Aである。1347～1351は弥生形甕Aで、口縁部がやや内湾する1348～1350、やや外反する1347・1351がある。1340～1345・1355・1356は底部である。1346は小形鉢Cの口縁部であろう。1352～1354は高杯の脚柱部である。いずれも中空もしくは中空に近い。1358は手焙体部の破片で、体部最大径部分に突帯を貼付けて刻目を飾る。1357は製塩土器Cであろう。

1359～1367は埋土上層から出土した。1359は広口壺、1360・1361は庄内式甕A、1362～1366は鉢底部、1367は高杯口縁部である。

S A2218

1. 遺構(Fig.214, PL.21・25)

B-2区、C12S U周辺に位置する堅穴住居である。VI層を基盤として平面プランは極めて明瞭に検出された。検出標高は7.6mである。北側をS A2217、南側をS A2219によって僅かに切られている。また住居の北東寄りでは、SD2254が床面を割りつつ南北に走行している。平面形状は基本的に円形であるが、壁面には4カ所以上の極めて緩い角が認められ、不明瞭ながらも多角形住居と呼称することも可能である。規模は南北軸9.1m、東西軸9.1mで、検出面から床面までは30cm前後の高さがある。住居の壁に沿って幅約36cm、深さ16cm前後の壁溝が巡る。床面はほぼ基盤層であり、貼床らしい施設は認められなかった。13本の主柱穴が確認されたが、その配置関係からこれらの幾つかは同時存在せず、住居の規模を拡張させながらの改築の行われたことが判明した。当初の住居を1次住居、改築後を2次住居と仮称する(Fig.215)。

1次住居は6本の主柱穴で構成されている。主柱穴の間隔は一定でなく正六角形には配列されていない。しかし南東部の柱間が他よりも広く、これを結ぶ線の中点に直角の軸線を通すと、柱の配列はほぼ左右対称となる。またその他の後述する諸特徴を含め、主軸はこの軸線上に一致すると捉えておく。主軸の示す方位はN-29°-Wである。壁面は拡張を受けた際に削平されたものと思われ、全く遺存しなかった。従って当初の平面プランは知り得ない。ただ2次住居の平面プランに対し、1次住居の主柱穴は位置的に僅かに北西に寄っていることから、南東側を主とした拡張を受けたと推定される。2次住居の壁溝の内側には多角形の浅い溝が走るが、これが1次住居に伴う確証はない。ただ2次住居の主柱穴の幾つかは内側の溝と重複することから、一部については拡張以前に存在していた可能性も皆無ではない。この溝は幅31cm前後、深さ10cm前後で直線的に、東西は主軸とほぼ平行、また南北は主軸に対し直角方向に設定されている。それぞれの直線溝は直接つながらず、北側ではその両者間に約45°の角度

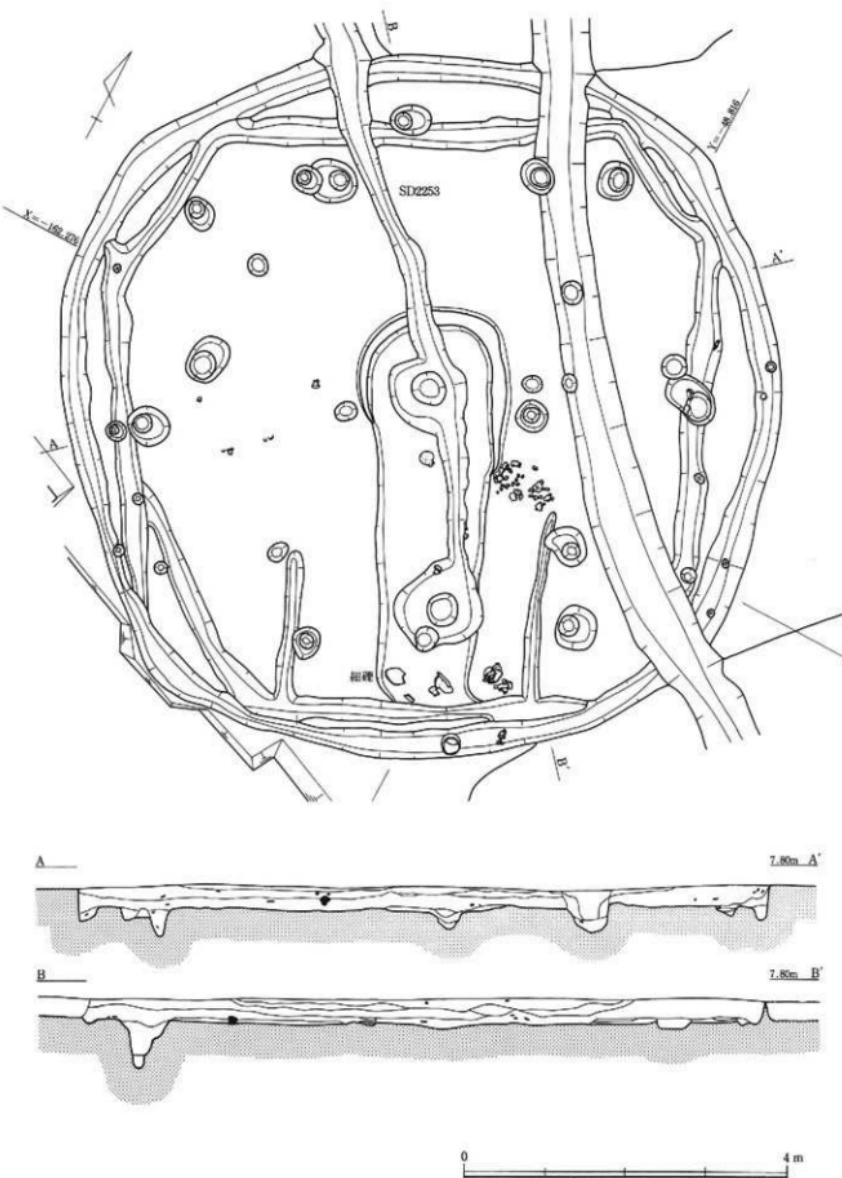


Fig. 214 S A 2218平面図・断面図

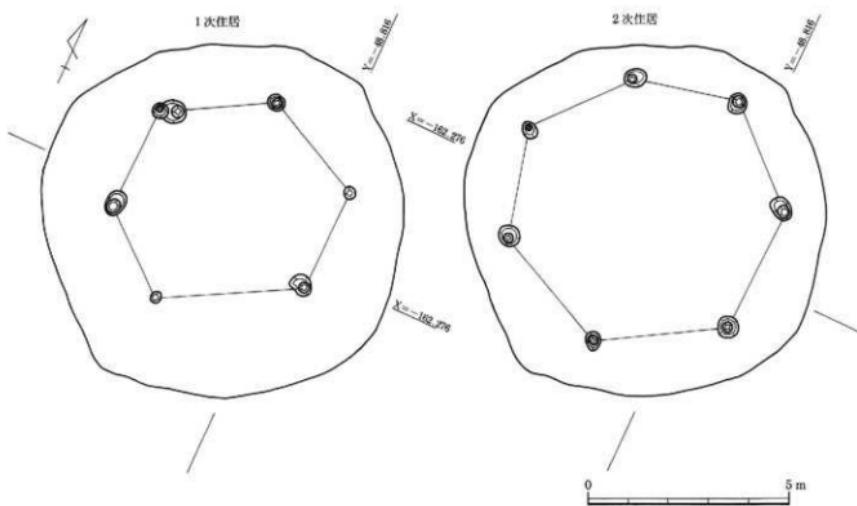


Fig. 215 SA2218主柱穴配置変遷図

で短い直線溝が介在し相互を連結する。南側もほぼ同様であったと思われるが、明瞭には検出できなかった。主柱穴の掘形は直径24~44cm、深さ48~52cm、柱痕跡の直径は12cmで、北西の主柱穴は1度建替えられている。

2次住居は7本の主柱穴から構成されている。南東部の柱間を結ぶ軸線の中点から直角に軸線を通すと北側西寄りの主柱穴を通過し、この軸線を挟む東西主柱穴は1次住居と同じくほぼ対称形に配列されている。これを主軸と解すると方位はN-32°-Wである。主柱穴の掘形は直径32~52cm、深さ40~50cm、柱痕跡の直径は24cmである。床面はほとんど基盤層が露出し、また改築に際して嵩上げは行われていない。このことから床面の標高は1次住居とほぼ同じか、あるいは掘り下げられてレベルが低くなっていると思われる。住居中央の床面には炉が設けられており、主軸線上の南壁寄り床面から炉にかけては幅92~144cm、深さ4cmの浅い帯状の窪みが存在する。炉の北側には高さ3cm、幅26cmで基盤層を削り出した炉堤が半円形に巡るが、南側には炉堤がなく前記した帯状の掘込みと連続している。またこの掘込みの南端部には75cm×100cmの不定形な範囲に、直径数mm以下の細礫からなる薄い層が分布をみせていた。

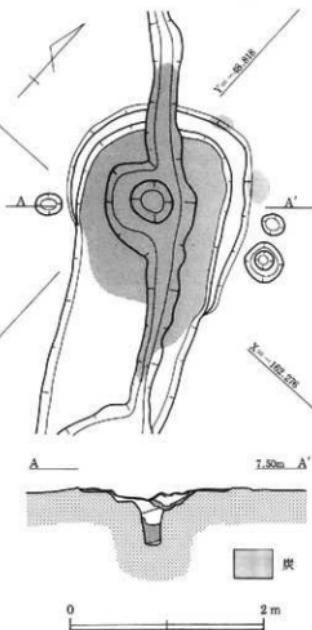


Fig. 216 SA2218炉平面図・断面図

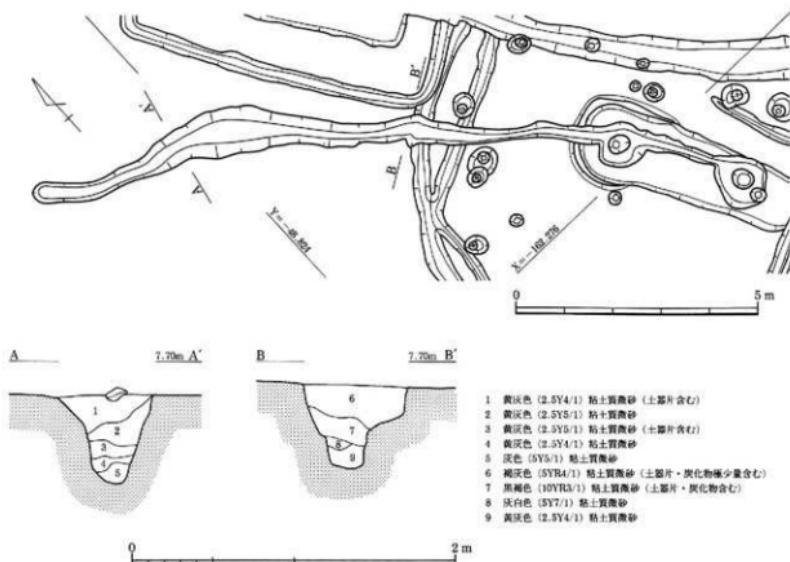


Fig. 217 S D 2253平面図・断面図

炉の構造は炉堤の他に直径93cm前後、深さ12cmの不整円形を呈する前庭部と、その中央部に直径37cm、深さ50cmの本体部分がある(Fig. 216)。この北側に炉堤を備えており、前庭部と炉堤の間に幅の狭い平坦面がある。炉本体では下半部に厚い炭層の堆積があり、間層を挟んで上層から炉堤にかけては南北3.2m、東西1.4mの範囲で炭が薄い堆積をみせる。炭層の分布は北側では炉堤、南側では掘込みの一部におさまる。さらに炉前庭部の東側部分では、炉堤を切って本住居の排水溝S D 2253が貫通するが、炭層は炉周辺の排水溝底まで認められる。切合の関係からS D 2253は、炉の本体がかなり埋没してから形成されたと考えられる。溝の上層にも薄い炭層の堆積がみられるので、排水溝形成後も炉が機能していたことが明らかである。

排水溝S D 2253は住居南側壁付近の土坑を起点としている。この土坑は径1.0~1.2mの不整椭円形を呈し、底は深さ54cmで2段に落ち込んでいる。S D 2253はこの土坑から炉を貫通して北西方向へと向かい、さらに壁面を破って屋外に通じ大溝S D 2206へと注いでいる(Fig. 217)。全長は4.5m、溝幅は20~100cmで、屋外では溝幅が広がる。深さは屋内25cm、屋外55cmである。排水溝が屋外に抜ける北西壁面では、屋内と屋外の溝の接点に微妙なずれが認められた(Fig. 218)。すなわち排水溝は建築の当初には設計されておらず、住居上部構造を建築後、必要に応じて家屋の内外から溝の掘削が行われた結果、



Fig. 218 S A 2218壁内外でのS D 2253のずれ

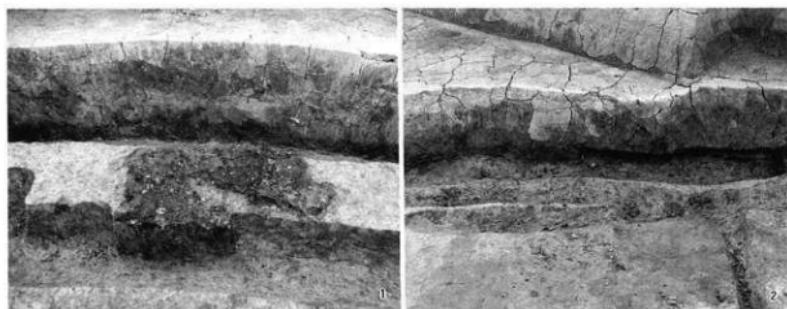


Fig. 219 S A2218壁面下部の変色帯(1.掘削前, 2.掘削後)

それが生じたと解することができる。排水溝が当初設計になかったことは、炉との切合い関係からも裏付けられる。S D2253の埋土から、壺・甕底部など若干量の弥生土器細片が検出された。

住居壁はほぼ直立に立ち上がっているが、壁面下部のかなりの範囲で水平に延びる帶状の変色帯が確認された(Fig. 219)。これは壁面の大半を占める基盤層の最下端部において、壁溝に接する部分に褐灰色(7.5Y R4/1)微砂が垂直の壁面に連続して存在するもので、基盤層の変色ではなく質の異なる土の充填として認められた。この変色帯は14cmの幅をもち、断割りによる断面観察では、下端部は壁溝底から連続し、壁面に約3cmの深さの抉り込みがある。何らかの壁面施設の痕跡と考えられる。

本住居は焼失住居であり、床面には炭・炭化物が部分的に分布し、壁面の一部は堅く焼け締まっていた。壁際付近の床面の一部に、住居中心に向かう板状の炭化木質組織が認められたが、量的には僅少であった。また柱材などの痕跡は一切認められなかった。

2次住居の内側に直線的な溝の巡ることは既に述べたが、この溝の南辺には直角に2条の短い溝が延びる。これらの長さは1.9~2.4mで、深さは10cmである。相互間の距離は2.8mで、平行に設けられている。溝は床面の途中、1次住居の南側の主柱穴付近で途切れる。このことから1次住居に伴う間仕切りとの解釈が可能である。以上のように住居の主軸とした軸線を中心に、主柱穴、溝、炉につながる浅い掘込みなど、軸線に乗るか、もしくは軸線を挟んではば左右対称形に配置されることがわかる。また間仕切りの想定により、住居の入口は主軸線上の南側にあたると考えておきたい。

2. 遺物(Fig. 221~224, PL. 110)

出土土器は量的には多くない。床面から検出された土器も限られている。この点で本住居は焼失住居ではあるが、多くの土器を残す焼失住居のS A2216とは、かなり異なった様相を呈している。確実に床面に伴う土器は、高杯1377、甕1385、手焙1396、大形鉢1397、製塙土器1398・1399以外なく、しかもその多くは破片であった。その他、確実に住居に伴う土器は、すべて住居を全周する壁溝の内部から検出されており、壺1373、高杯1378、甕1380・1381、鉢1389・1390・1392・1393、手焙1395、製塙土器1400がある。1368~1401までの土器のうち、上記した以外の個体は埋土下層からの出土品である。床面、もしくは壁溝出土土器のうち、特に手焙の出土状況は特徴的で(Fig. 220)、1395は住居主軸線上の南端において、壁溝底に接し正立状態で検出された。またその北側100cmの床面上には1396がやはり正立状態で検出されている。前者は完存品で、後者も残存状態は比較的良好である。以上のように2個体の手焙が、住居の出入口付近と想定される位置から検出されたことは示唆的で、この住居が床面遺物に乏し

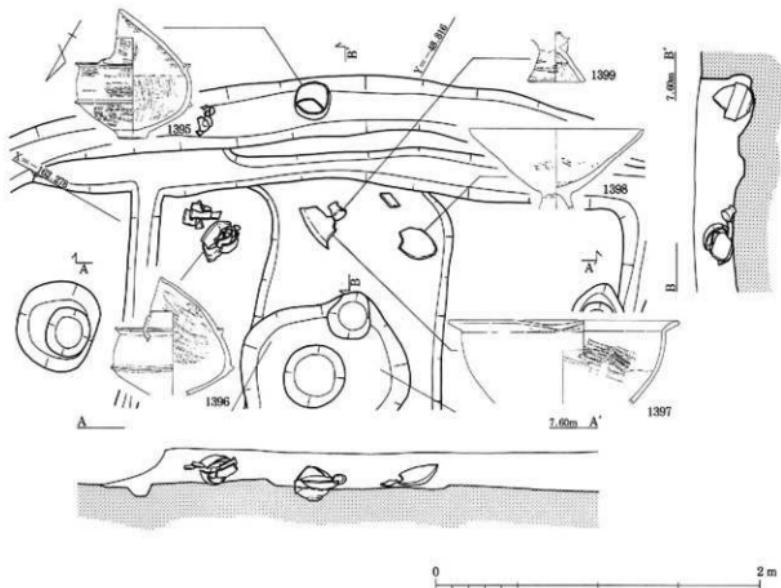


Fig. 220 S A 2218遺物出土状況図

いこととも無関係ではなかろう。また手焙が溝底に接していたので、住居廃絶時に壁溝が埋まっていなかったことは明らかである。また製塙土器1398・1399、大形鉢1397は、南端部の細縫の分布域において、礫層に接して検出されている。なお1402～1440は住居埋土の中・上層から出土した。

床面およびその周辺から出土した土器の器種には、壺(1368～1376)、高杯(1377～1379)、甕(1380～1388)、鉢(1389～1394・1397)、手焙(1395・1396)、製塙土器(1398～1401)がある。

1368は扁球状の体部に僅かに外反する短い口縁部を付加した壺である。頸部に細かい刻目を巡らせる。1369～1371は口縁部を失っているが壺に属すると思われる。1372・1373は複合口縁壺で、1372は口縁部下端に竹管紋を押捺した円形浮紋を配置する。1373は口縁部の屈曲が比較的緩い。1374は壺底部。1375・1376はミニチュア壺で、1376は台付壺を模している。

1377は有稜高杯Aで、口縁部の屈曲点はかなり下がっているが、稜線はややあまい。1378は小形の高杯脚部で、脚柱部は短い。1379はやや粗製の高杯である。口縁部は体部上方でやや外反するが、普遍的ではなく有稜高杯Bに属する。

甕はすべて弥生形甕Aで、口縁部は「く」字状に屈曲するものが多いが、1385は緩やかな屈曲をみせる。口縁端部の形状は丸くおさめたものが多い。

小形鉢は、球形の体部にやや外反する口縁を備えた1389以外は、遺存状態が不良である。底部の形態からA(1394)、B(1391・1392)の存在が知られ、また1390はE、1393はDに分類されよう。大形鉢1397には片口が設けられている。

1395は底部と体部の境界に突帯を巡らせる手焙で、突出した平底を備えている。底部にはタタキ成形

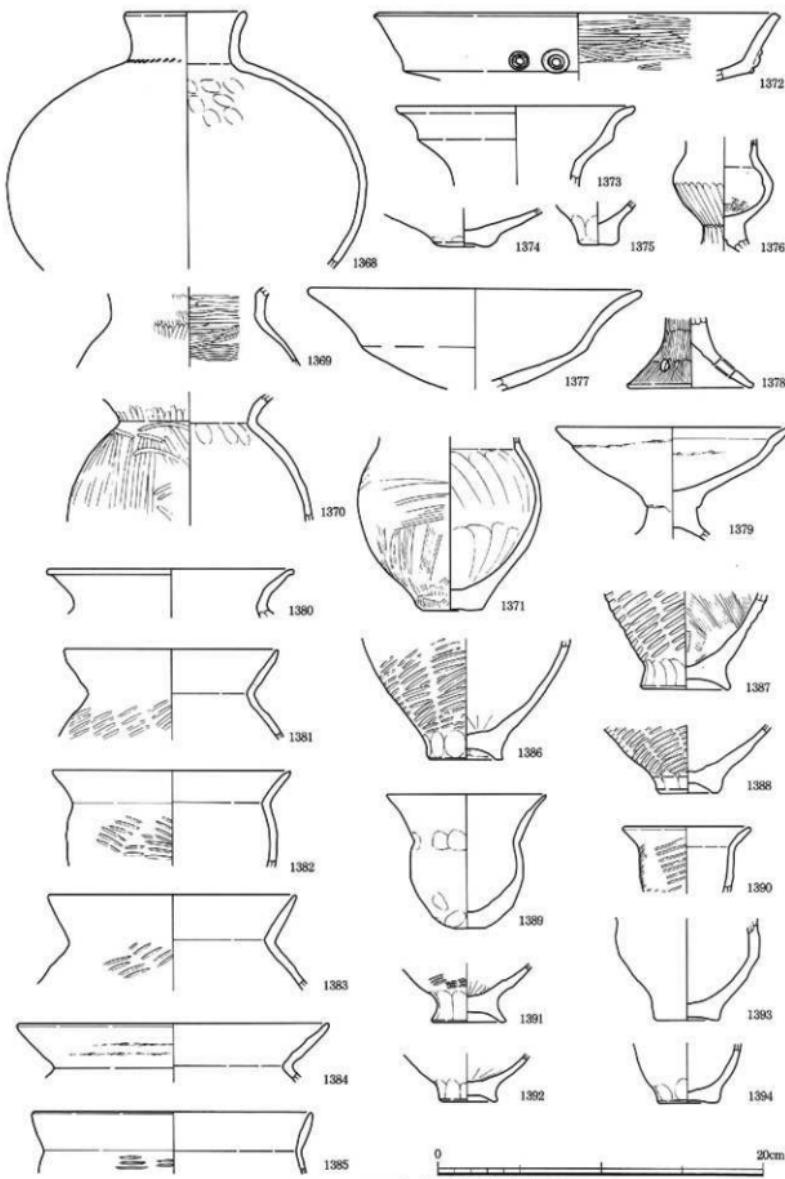


Fig. 221 S A2218出土遺物実測図(1)

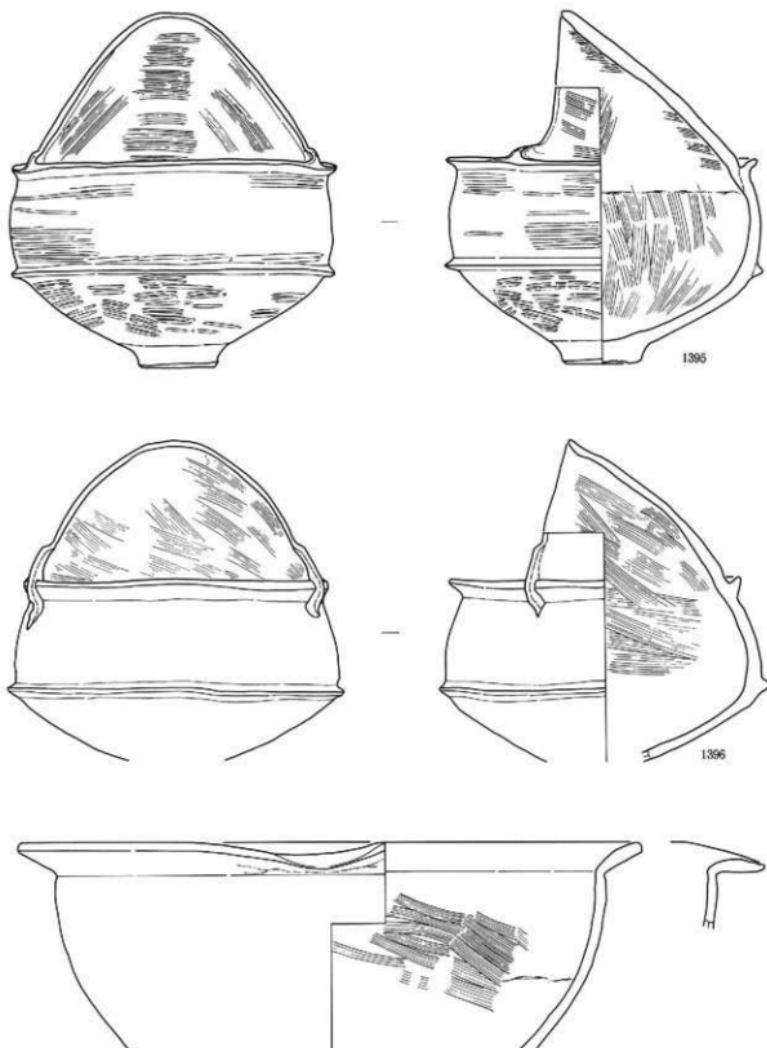


Fig. 222 S A 2218出土遺物実測図(2)

0 1 20cm

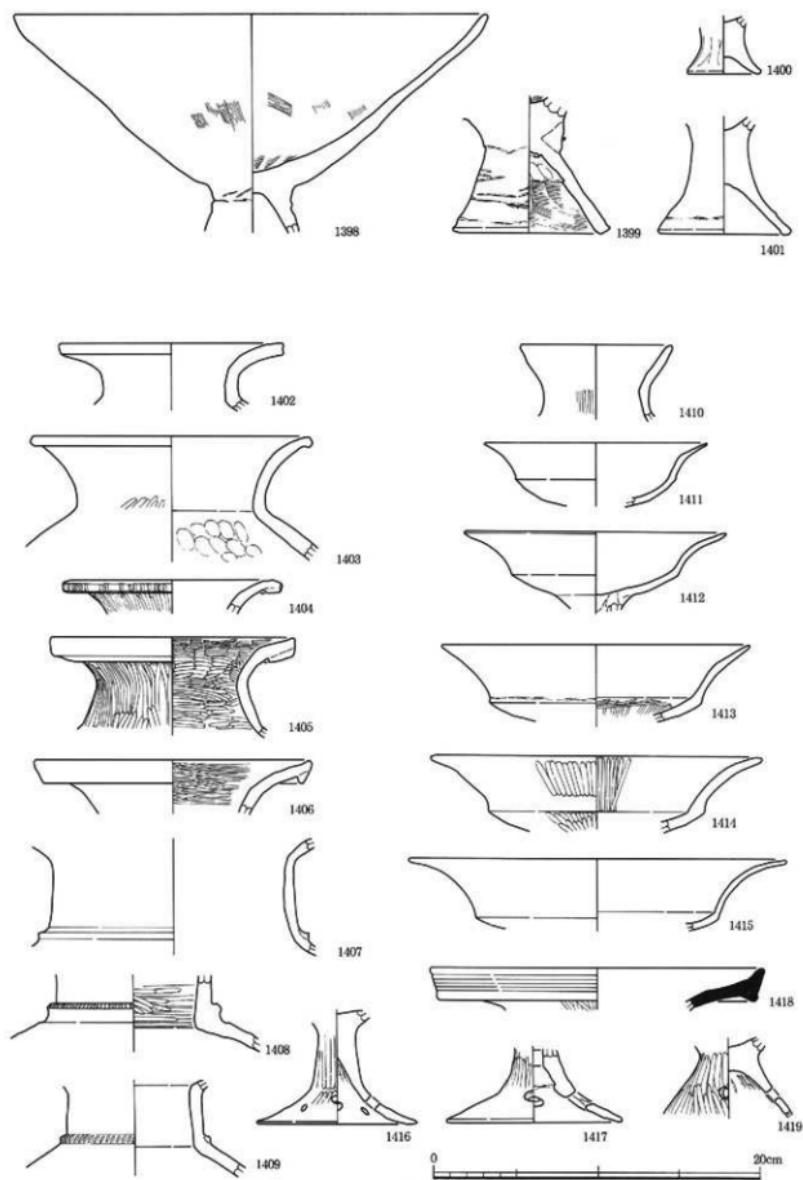


Fig. 223 S A2218出土遺物実測図(3)

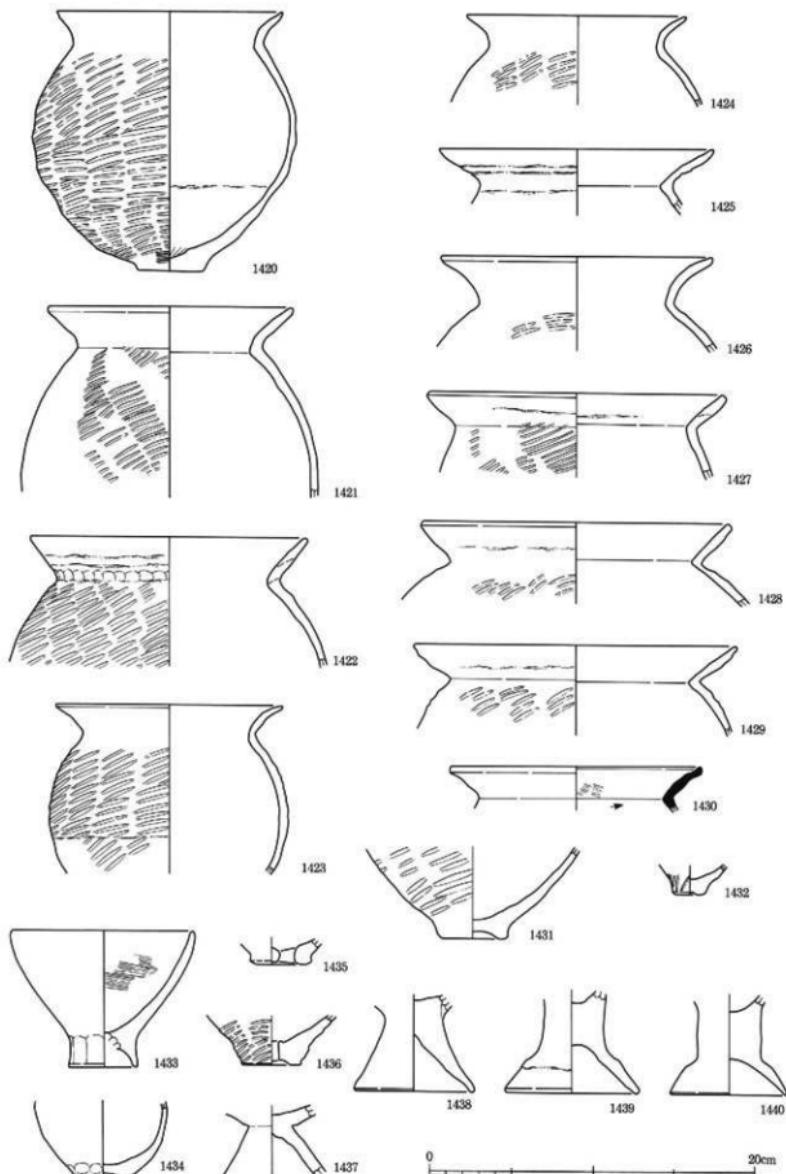


Fig. 224 S A 2218出土遺物実測図(4)

痕が残されている。やや膨らみ気味に直立する体部から、僅かに口縁部が外反する。覆部は口縁部が短く外反する部分直下に接合されている。覆部の頂部はやや尖り気味の傾向がある。1396は1395とほぼ同形同大であるが底部を欠いている。体部は膨らみ気味にやや内傾し、覆部の頂部は丸い。また覆部の開口部下端に、口縁部にまたがって紐状の粘土帯を貼付する点で1395と異なる。

1398～1401は製塙土器である。1398は強固な作りの脚台に大きく鉢形に広がる体部を備える。タタキの後、全面ナデ仕上げ。1399は脚台だけであるが、1398と同形態になると思われる。1400はかなり小形の脚台、1401はやや丸味をもった形状の脚台である。

中・上層出土土器は、床面出土遺物と時期の近いものと、明らかに時期が下るものがある。器種には壺(1402～1410)、高杯(1411～1417)、器台(1418・1419・1437)、甕(1420～1431)、鉢(1433～1436)、製塙土器(1438～1440)、ミニチュア土器(1432)がある。

1402～1406は広口壺である。これらのうち1402・1403は広口壺A、1404～1406は口縁端部外面に粘土帯を付加した広口壺Dである。1404は肥厚させた口縁端面に刻目を飾る。1407～1409は口縁端部の形状は不明であるが、ほぼ同形態を呈すると思われる壺で、口縁は直立してから外傾する。頸部には突帯を巡らせ、1408・1409はその上に刻目を施す。1410は口縁部が緩やかにくびれて外上方に広がる壺。

1411～1415は有稜高杯Aで、口縁部が長く外反するものが多い。1416・1417は脚部である。

1418の器台は口縁端部外面を上下に拡張し、端面に5条の擬凹線を配する。丹波・丹後系の外来系土器の可能性がある。1419・1437は小形器台Bと思われる。

1420～1429・1431は弥生形甕Aで、タタキ成形された体部に「く」字状口縁をもつ。1420の体部は球形化しているが、僅かに突出する平底を残す。1430は庄内式甕Aである。

小形鉢には、体部が僅かに内湾する小形鉢Aの1433、半球状の体部と緩やかに底部が一体化した1434がある。1435・1436は平底中央に1孔を穿った有孔鉢である。

1438～1440は製塙土器の脚台部で、いずれもナデ仕上げである。脚台が円錐状に直線的な1438、半球状に丸味をもつ1439・1440がある。

S A2219

1. 遺構(Fig. 225, PL. 21・26~28)

B-2区、C12TW周辺に位置する方形堅穴住居である。VI層を基盤として平面プランは極めて明瞭に検出されたが、南隅角部は調査区外に及んでいる。検出標高は7.6mである。北西の壁が、S A2218の南東側壁面を僅かに切り崩している。主軸をN-52°-Wにとり、長軸の長さは7.2m、短軸の長さは6.9mである。検出面から床面までの高さは約44cmで、住居の壁に沿って幅約40cm、深さ28cm前後の壁溝が巡る。壁面は概ね直線的であるが、南東壁は壁のほぼ中央が僅かに外に張り出している。住居床面は基盤層を掘込んだ後、黄灰色(2.5Y4/1)粘土質微砂を埴土することによって貼床が形成されている。基盤層の掘込み面は凹凸が激しい。

住居の北西・北東・南西の3辺に沿って、幅100cm前後の室内高床部が帯状に巡り、さらに南東辺にも左右から120cmの長さで張り出している。基本的に高床部は、住居掘形である基盤層掘込み面に贴床が施された後、黄灰色(2.5Y5/1)粘土質微砂を積み上げて形成されている。北西・北東・南西の3辺では高床部を構成する土は同じで、特に北東・南西の高床部は、その幅のまま南東壁まで至っている。これに対し、南東辺にある長さの短い高床部は土色がやや異なることから、後から付加された可能性が高い。

内区の4隅には、4本の主柱穴が設けられている。柱穴は掘形の径52cm、深さ80cmで、柱痕跡の径は

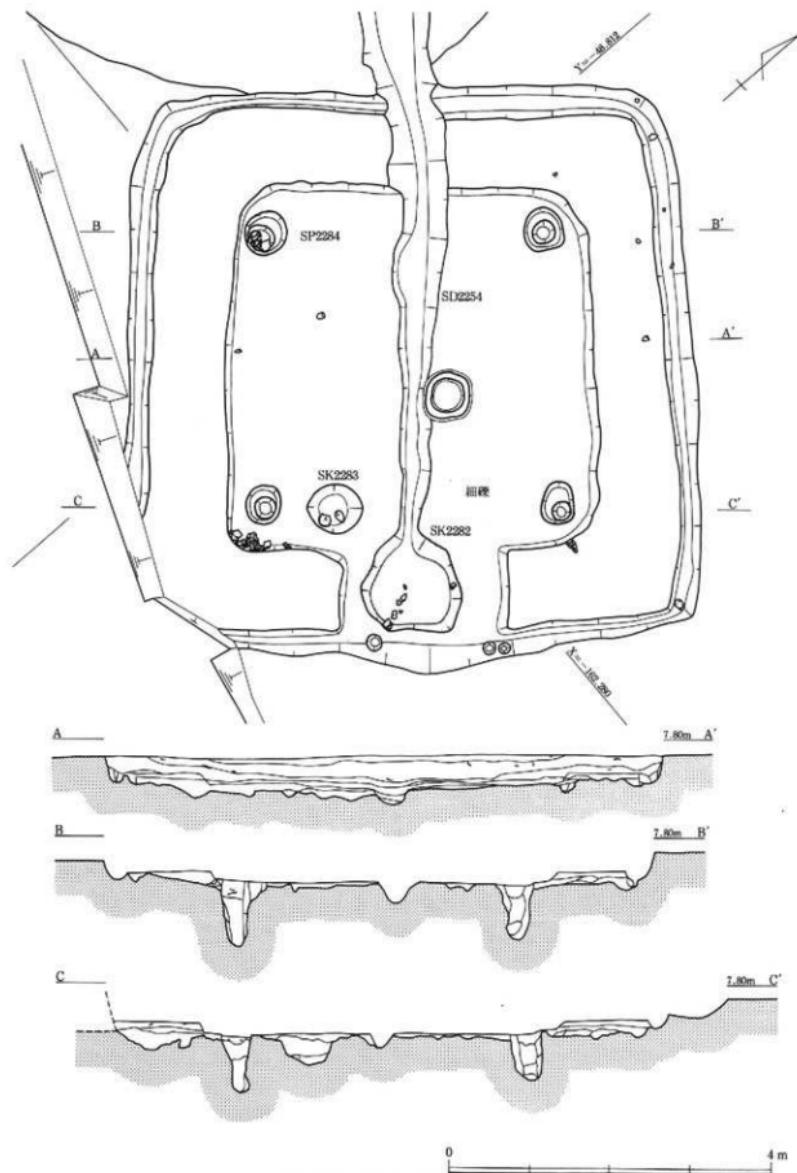


Fig. 225 S A 2219平面図・断面図

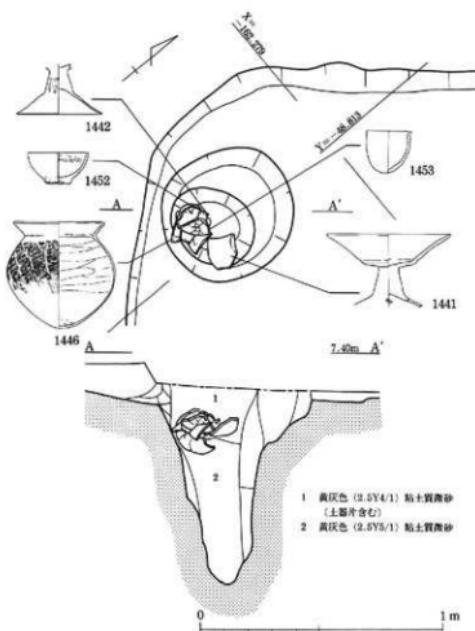


Fig. 226 S P 2284遺物出土状況図

にも炭が及んでおり、排水溝が住居内で蓋などを伴わず開放状態にあったことが分かる。また炉は住居中央を通過する排水溝を避けるように、その東側に接して作られている。すなわち排水溝の設置に遅れて炉が設定されたようであるが、排水溝は後述する理由により、住居構築当初には存在していなかった可能性があり、炉自体も最終的な位置関係を示すに過ぎないので、前後関係についての即断はできない。

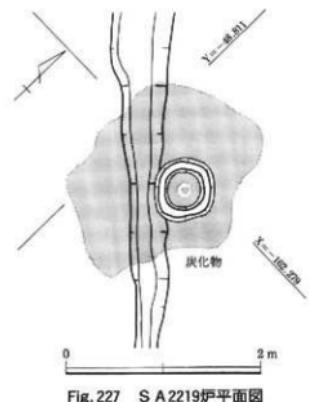


Fig. 227 S A 2219炉平面図

26cmである。柱痕跡はかなり明瞭に認められた。主柱穴のうち北西隅にあたる S P 2284の柱心部分上層からは、高杯(1441・1442)・鉢(1452・1453)・庄内式甕(1446)が集中して出土した(Fig. 226)。住居の廃絶に際し柱が抜き取られたことを示す。

床面中央からやや東に偏して炉が設けられている(Fig. 227)。炉の設定に際してほとんど床面は掘込まれておらず、高さ2~3cm、幅16cmの炉堤が、直径60cm前後で円形に巡るのみであった。炉内部の床面は、炉堤を含めて堅い焼け跡をみせ、また炉の中央部は特に径13cmのドーナツ状に強く焼け、赤変していた。炉から周辺にかけては南北2.1m、東西1.6mの範囲で炭の不定形な分布が認められた。炉の西側には本住居に伴う排水溝 S D 2254が走るが、溝内部にある程度堆積した埋土上面

排水溝 S D 2254は住居南東壁付近の土坑 S K 2282を起点としている。この土坑は径1.2~1.3mの不整円形を呈し、底は深さ68cmである。土坑の底面、およびその周辺には直径数mm以下の細礫が面的に分布していた。この細礫層は5~15cm前後の薄い間層を挟み分布範囲の異なる上下2面が存在する(Fig. 228)。下面は長軸1.6m、短軸0.7mの範囲で S K 2282を中心に不定形に分布し、上層は長軸2.7m、短軸0.8mの範囲で S K 2282から北側に不定形に延び出し、主柱穴付近に至っている。土坑の南東側壁面には土坑の左右に径16cm、深さ10cm前後の小ピットが穿たれている。

住居内施設として、他に住居南東寄りの西側内区床面から土坑 S K 2283が検出された(Fig. 229)。S K 2283は長径72cm、短径60cmの楕円形を呈し、深さは75cmである。土坑内から高杯脚

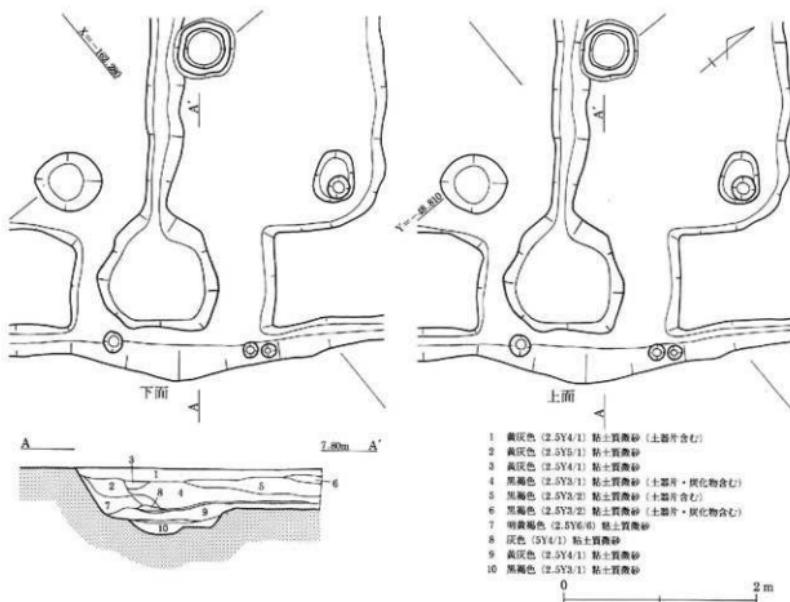
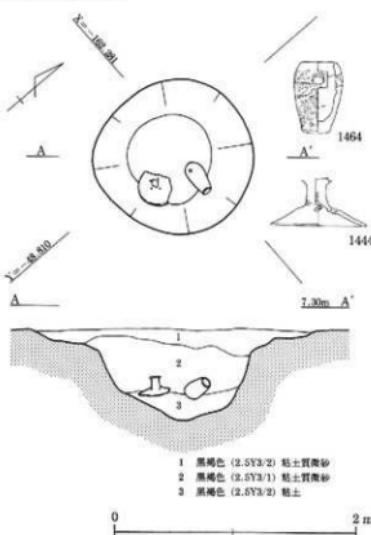


Fig. 228 S K 2282 細縫分布範囲の変遷図

部(1444), 姫壇(1464)が出土している。

排水溝 S D 2254は S K 2282を起点として北西方に向直線的に延び出し、北西壁面を破って屋外に通じる。さらにこの溝は S A 2219の北側に位置する S A 2218・2217・2216の3棟の竪穴住居を、蛇行しながら次々と縦断して大溝 S D 2206の1層へと注いでいる(Fig. 230)。溝の全長は33m、幅は40~88cmで、深さは屋内で30cm、屋外で65cmである。S D 2254が屋外に抜ける北西壁面では、屋内と屋外の溝の接点に微妙なずれが認められた。すなわちS D 2254は、S A 2218の排水溝であるS D 2253と同様に、上部構造が建築された後の段階で、家屋の内外から溝の掘削が行われた結果、それが生じたと解される。S A 2216~2218では埋土の最上層からS D 2254の切込みが確認されており、S A 2219に排水溝が設定された時点では、この3棟の竪穴住居はほぼ完全に埋没していたことが分かる。S D 2254の排水方向は、この溝が住居から西



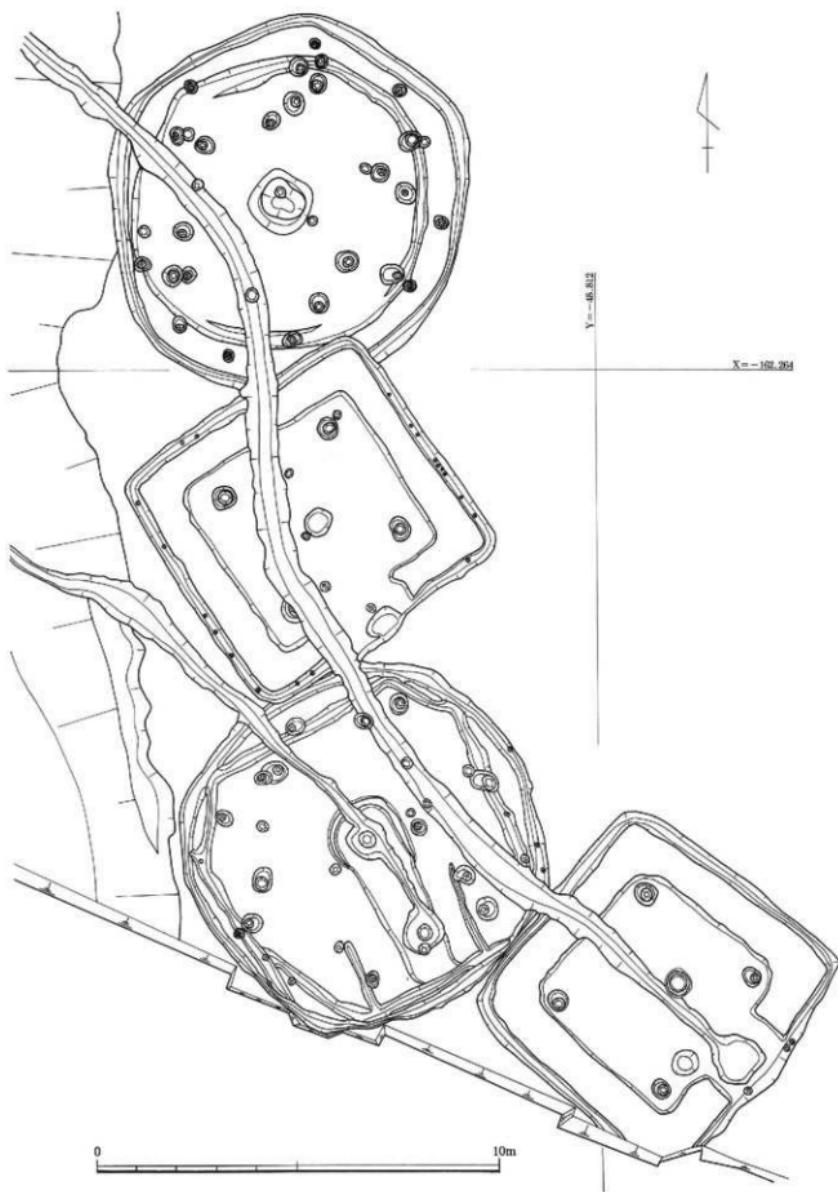


Fig. 230 S D 2254とS A2216~2218の切りい関係図

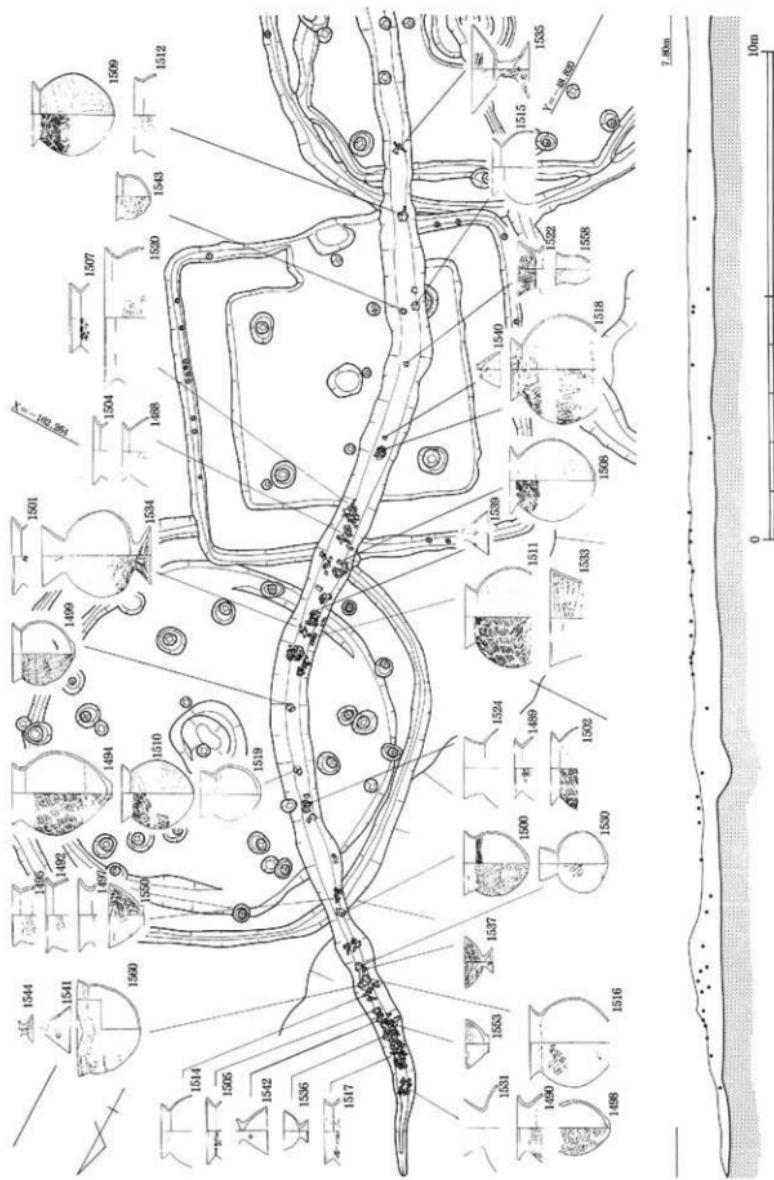


Fig. 231 SD2254遺物出土状況図

に向かえば、最終的に導水される大溝S D2206までの最短コースとなる。しかしあえて北西の住居址を連続的に縦断するコースが選ばれている。おそらくこの段階ではS D2206の埋没が進行しており、S A2219付近に接続した場合には、排水の効果が薄かったためと思われる。

S D2254からは多量の土器が出土した(Fig.231)。土器は特に溝の北西半、すなわち、S A2216～2218の埋土を切り込んだ溝の上層からまとめて検出された土器が大半を占める。なかでもS A2216の南側と北側、それぞれ長さ3m前後の範囲内で検出密度が高い。これに対してS A2219床面範囲内のS D2254からは、全く土器の出土をみていない。すなわちこれらS D2254出土土器はS A2219の経営時期と重ならず、住居廃絶後に堆積したものと考えられる。

なお本住居から出土した土器は、前記したようにS P2284、S K2283などの住居内施設に伴うものが大半で、床面には内区、外区ともに僅かな土器片の分布が認められたに過ぎない。なお南東隅の壁溝内から婧壺(1463)が完形で出土した。

出土遺物はS A2219に関わるものと、その排水溝S D2254に関わるものとに大別され、両者の帰属時期は前述したように時間差を有すると考えられる。従って住居関係と溝関係に分けて報告を行う。

2-a. S A2219遺物 (Fig.232・233, PL.111)

1441～1465は住居内施設から出土した。このうち1441・1442・1446・1452・1453がS P2284、1443・1455・1457・1462がS K2282、1444・1464がS K2283、1449・1450・1465が壺、1448・1451・1454・1459・1463が壁溝、1456・1460が貼床内、1445・1447・1458・1461が屋内高床部盛土内から出土している。器種には高杯(1441～1444)、壺(1445・1446・1449～1451・1459～1461)、壺(1447・1448)、鉢(1452～1458・1465)、婧壺(1462～1464)がある。

1441は有稜高杯Aで、口縁部と体部の境界は杯部下方にあり、体部の傾斜はほとんどなく水平に近い。口縁部は僅かではあるが外反している。脚部は完全に中実である。1442～1444は高杯脚部で、脚柱部内部が脚裾部から小さな円錐状に窪む1443・1444と、中実の1442がある。いずれも脚柱部と脚裾部の境界が明瞭である。

壺には庄内式壺A、弥生形壺Aがある。1445・1446は庄内式壺Aである。いずれも口縁端部は上方に拡張され、体部外面を細かいタタキで成形し、頸部内面直下にケズリを加える。完存する1446では最大径が体部のやや上半にあり、底部はやや尖り気味である。また外面は最大径以下をハケ調整する。他の壺は弥生形壺Aで、底部はすべて平底である。

1447は複合口縁壺で、受部から口縁部の屈曲は緩い。1448は壺底部である。

1452～1458は小形鉢で、1452は小形鉢A、1456～1458は小形鉢Bと思われ、1453は丸底の小形鉢である。1465は大形鉢である。

婧壺のうち1462・1463はナデ仕上げで底部が丸く、1464はタタキ仕上げで平底様の底部をもつ。

1466～1477は内区下層から出土した。器種には高杯(1466・1467)、壺(1468・1469・1475・1476)、壺(1470・1471)、鉢(1473・1474・1477)、皮袋(形土器)(1472)がある。

1466・1467はいずれも有稜高杯Aで、口縁部はほぼ直線的に立ち上がるが、ごく僅かに外反する。

1468・1469は広口壺、1475は小形壺、1476は複合口縁壺である。1476は口縁部が垂直に近い角度で短く立ち上がっている。

1470は弥生形壺Aで、遺存状態が極めて不良で調整が確認できない。1471は庄内式壺Aである。

鉢には1473の小形鉢E、1474の有孔鉢、1477の大形鉢がある。

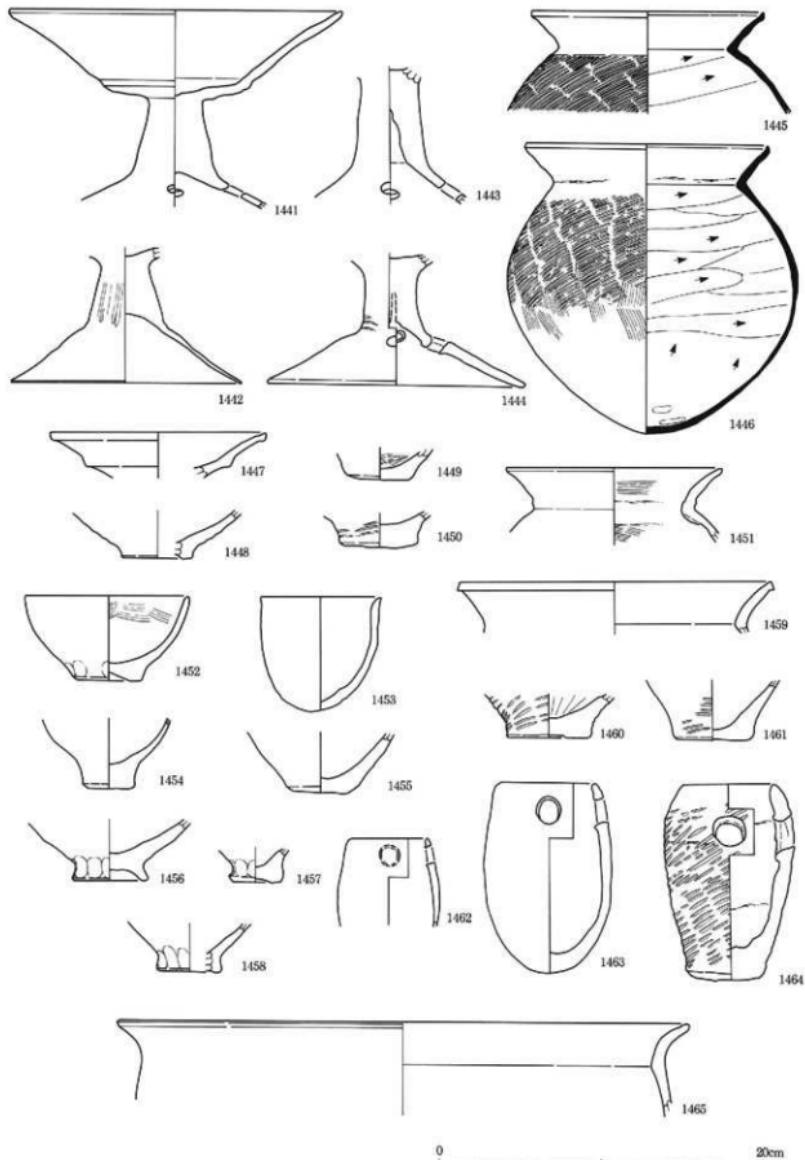


Fig. 232 SA 2219出土遺物実測図(1)

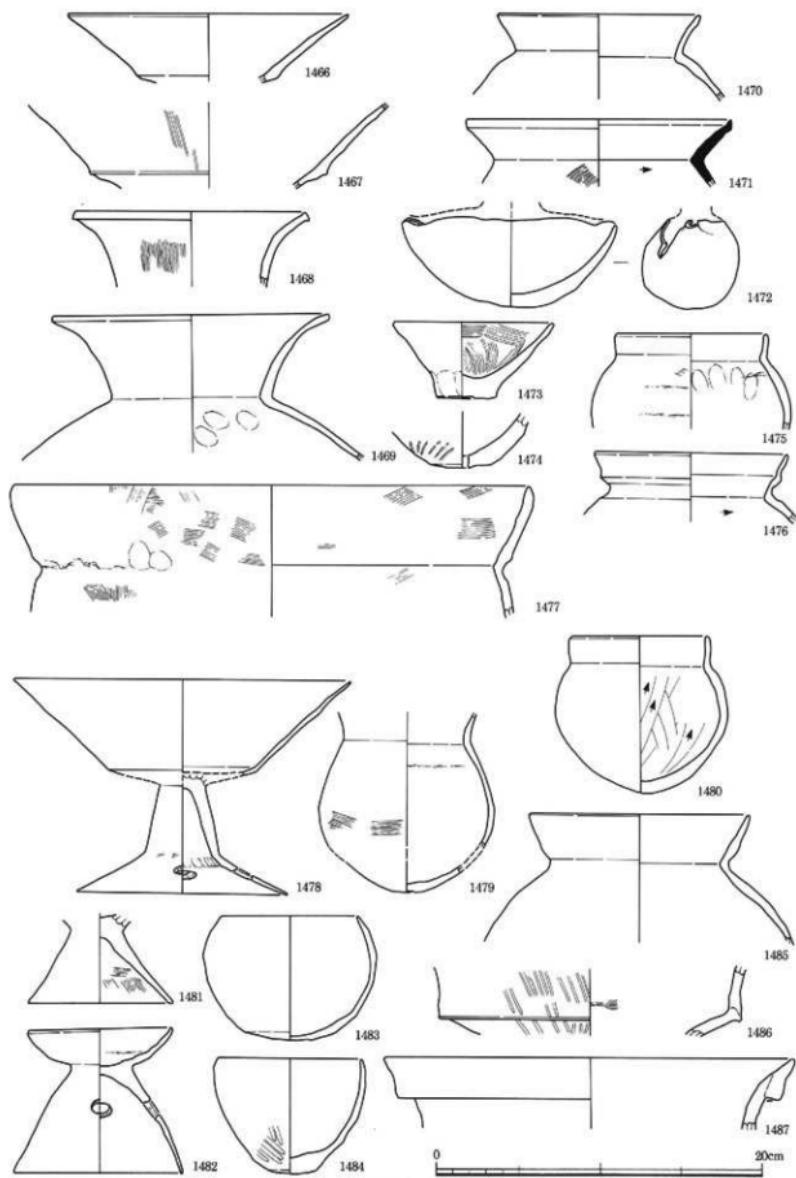


Fig. 233 S A2219出土遺物実測図(2)

1472の皮袋は遺存状態が極めて不良で、また口縁部を失っている。体部は粘土板を舟形に丸めて成形され、上端で粘土板の端を接合して作られている。先端部が注口になる可能性もある。

1478～1487は中・上層から出土した。高杯(1478)、壺(1479・1480・1486・1487)、甕(1485)、小形器台(1482)、鉢(1483・1484)、脚台(1481)などの器種がある。

1478は有稜高杯Cで、短く水平に近い角度の体部と、直線的に長く延びた口縁部を備える。脚柱部と脚裾部との境界は明瞭で、全体に外形ラインは直線的な構成である。脚柱部内部は中空。

壺には口縁形態が不明の1479、小形壺1480、複合口縁壺1486、壺X1487がある。1486は口縁部が垂直に立ち上がり、1487は口頸部外面に幅広の口縁部を付加し、外見上は複合口縁様の形態を作る。

甕1485は布留式粗形甕である。調整は不明。

1482は小形器台Bで、口縁端部はほとんど拡張されていない。

鉢には体部が球形を呈する小形鉢Xの1483、小形鉢Aの1484がある。1484は平底の形跡を残すが、体部と共に球形に近い形態である。

1481の脚台は、無孔の低脚杯脚部の可能性がある。

2-b. S D 2254遺物(Fig. 234～238, PL. 112～115)

1540以外は溝の上層から出土している。器種には甕(1488～1518)、壺(1519・1521～1534)、高杯(1535・1544)、鉢(1520・1536・1537・1545・1546・1550～1560)、小形器台(1539～1542)、小形丸底土器(1543)、製塩土器(1547～1549)、蛸壺(1538)がある。

甕には弥生形甕A・B、庄内式甕A、布留式粗形甕がある。1488～1500・1512・1513・1517は弥生形甕Aである。いずれもタタキ成形されているが底部には各種の形態が認められ、平底をもつ1494・1499、尖底気味の1498、丸底の1500がある。また体部形態も様々で、倒卵形の1494・1498、球形に近い1499・1500がある。1512・1513は口頸部の屈曲が緩やかで、また口縁部の立ち上がりが急角度である。1517は小片のため詳細は不明だが、タタキの後、口頸部直下にハケを加えている。1511は弥生形甕B、すなわち庄内式甕を模倣した弥生形甕で、球形の体部に直線的に立ち上がる口縁部を備える。体部外面はやや細目のタタキ、体部最大径以下にハケをもち、内面は頸部以下にケズリを加える。しかし口縁部の立ち上がり角度や、口縁端部の造作は庄内式甕とは異なる。1501～1510は庄内式甕Aで、法量からみれば相対的に小形の1510、大形の1508・1509などがある。最大径は体部の中央より僅かに上位に位置し、底部は丸底に近い尖底である。いずれも右上がりの細かいタタキで成形され、1509では最大径部のやや上からハケ調整されている。1514～1516・1518は布留式粗形甕である。1514・1515は口頸部にヨコナデが強く施され、口縁部がやや内湾する。1516・1518は体部外面をハケ調整した甕で、1516ではハケに先行するタタキ成形痕が僅かに観察される。

壺には各種の形態のものがある。1521は広口壺A、1523・1524・1529は短頸直口壺、1528は小形壺、1522・1531～1533は直口壺、1534は台付壺、1525～1527は複合口縁壺、その他である。広口直口壺では口縁部が直線的な1523、やや外反する1524、やや内湾する1529がある。直口壺は1532・1533など大形のものがあり、また口縁部の形態は大きく開く1531・1532、立ち上がりの強い1533がある。複合口縁壺では口縁部が受部から比較的緩やかに屈曲する1525・1527、外反気味に屈曲する口縁部外面に2個一対の竹管円形浮紋を配する1526がある。1534は大きく開く口縁部をもつ直口壺系の壺に、低い脚台を付加した台付壺である。その他、壺Xの1519・1530がある。1519は丸底で球形の体部をもつ粗製の壺、1530は下膨れの球形体部に、短く内湾気味に立ち上がる口縁部を備え、外見上は瓢形壺に似た壺である。

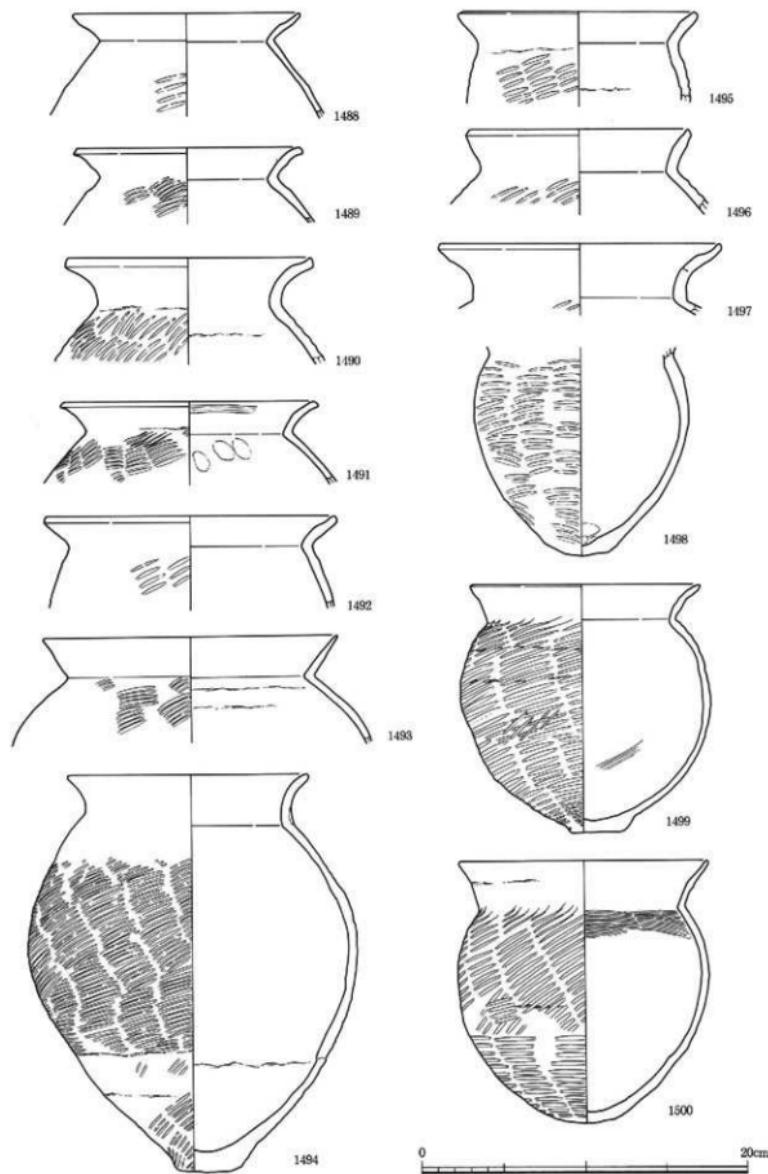


Fig. 234 SD2254出土遺物実測図(1)

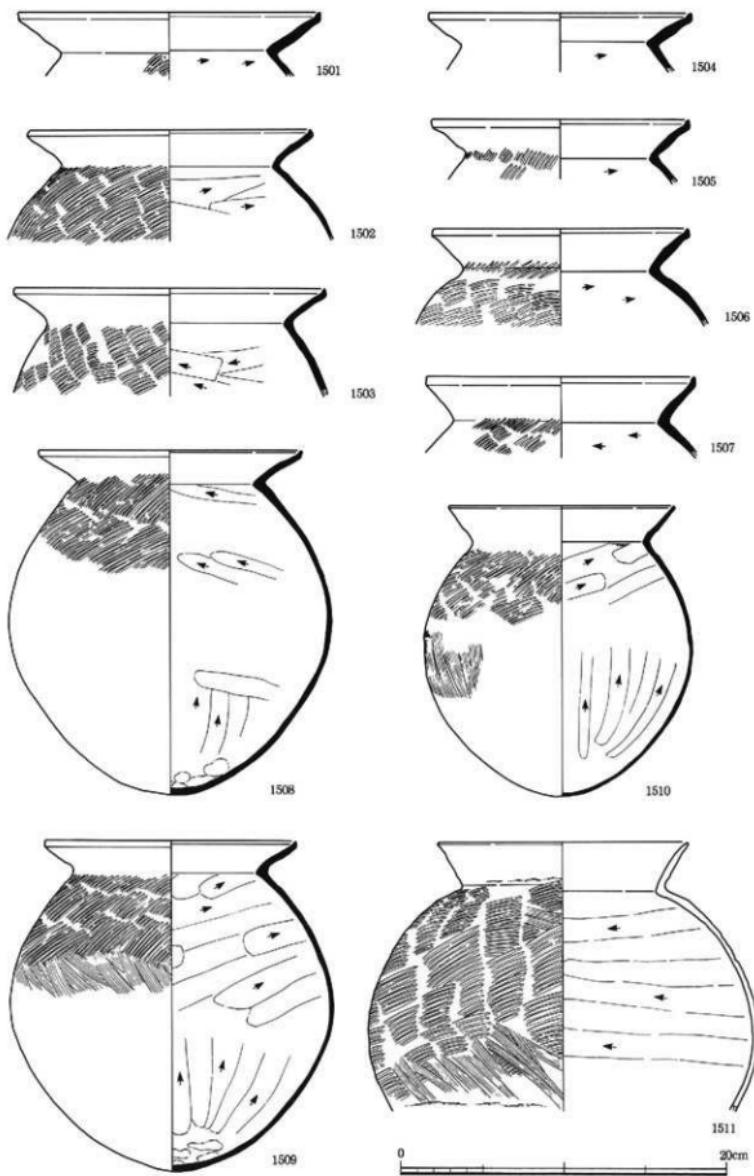


Fig. 235 S D 2254出土遺物実測図(2)

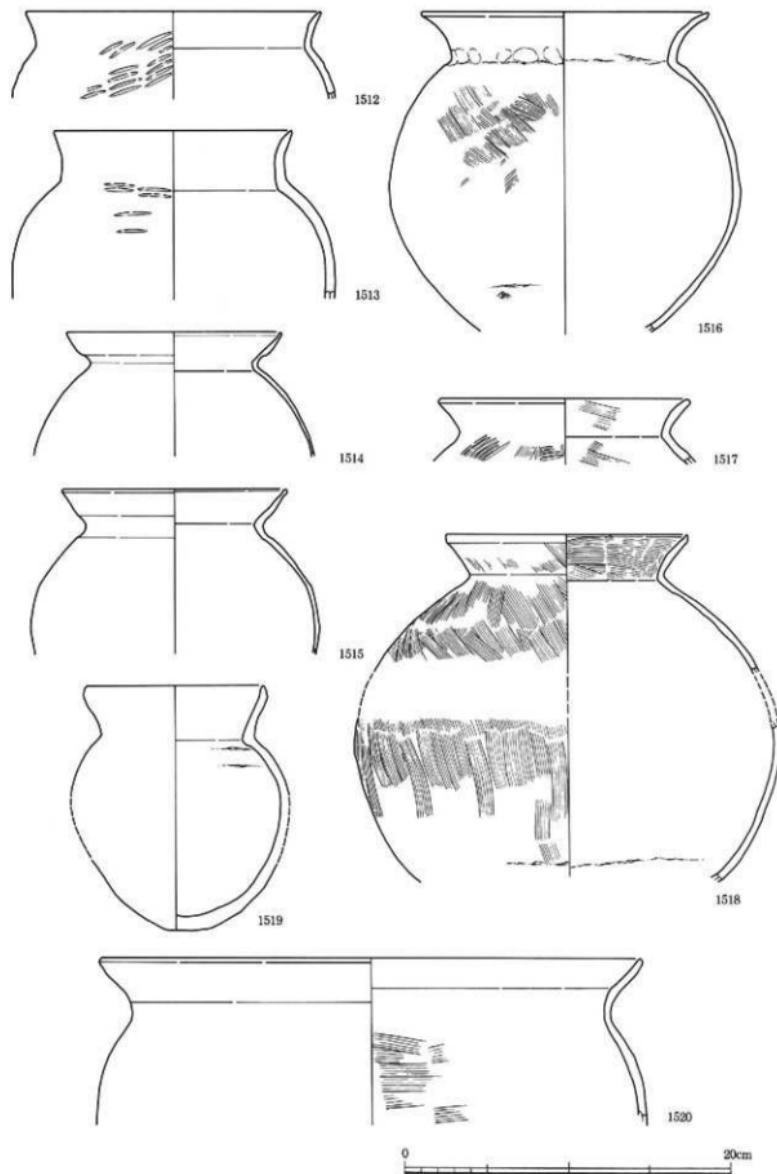


Fig. 236 S D 2254出土遺物実測図(3)

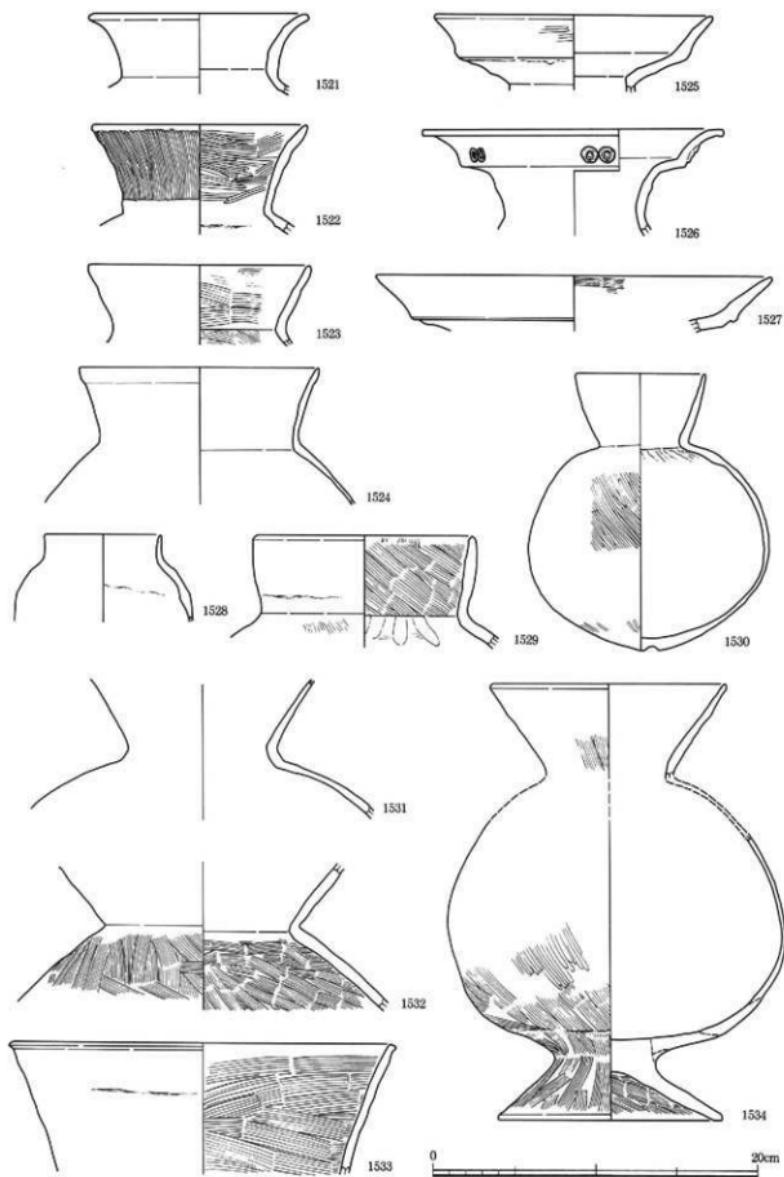


Fig. 237 S D 2254出土遺物実測図(4)

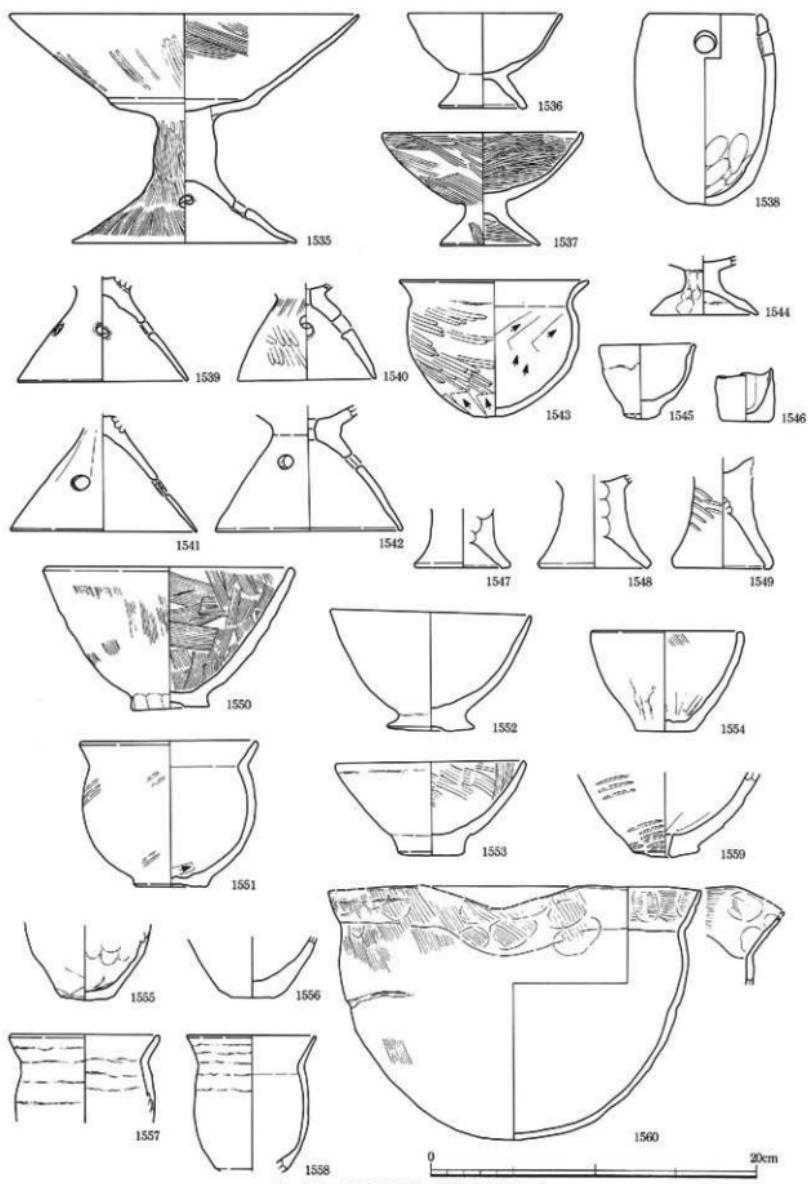


Fig. 238 S D 2254出土遺物実測図(5)

1535は有棱高杯Aで、体部は短くほぼ水平に近く、口縁部は直線的に外上方に延びる。脚柱部と脚裾部の境界が明瞭で、脚柱部は中実である。1544は高杯形のミニチュア土器である。

1550・1552～1554は小形鉢A、1551は小形鉢D、1559は有孔鉢B、1560は片口をもつ中形鉢、また1536・1537は低い脚台をもった台付鉢である。1555・1556は突出しない平底をもつ小形鉢、1557・1558は接合痕を明瞭に残す粗製の小形鉢X。1545・1546はミニチュア土器の鉢である。

小形器台のうち1540・1542は小形器台A、1539・1541は小形器台Bである。脚部の形態は、小形器台Aでは脚部に内湾傾向をもち、小形器台Bでは直線的で三角錐状を呈する。

1543は小形丸底土器で、ごく狭い平底をもつ扁球状に近い体部に、短く外反する口縁部を備える。

製塙土器はいずれもBで、脚台内面の中空部が低い1547・1548、中空部が高い1549がある。

蛸壺1538はナデ仕上げで丸底を呈する蛸壺Bである。

S A 2220

1. 遺構(Fig.239, PL.29)

B-2区、C12NW周辺に位置する方形堅穴住居である。VI層を基盤として平面プランは極めて明瞭に検出された。検出標高は7.5mである。調査区の端部に位置しており、北東部は調査区外に及ぶ。住居の南西部は調査区を縦断するように走行する溝S D2255によって切られ、S A2220は壁面および床面の一部は損傷を受けている。主軸をN-31°-Wにとり、南西壁の長さ約4.8m、南東壁の長さ約5.1mの規模をもつ。検出面から床面までの高さは26cmである。住居床面は基盤層を掘込んだ後、掘形面上に黒褐色(10Y R3/1)粘土質微砂を薄く敷き均して貼床が形成されている。壁面はほぼ直線的に作られているが、隅角部はやや丸味を帯びる。柱穴は調査区外に位置すると思われる柱穴を除き、床面3カ所に検出されている。柱穴掘形の径は40～56cm、深さは43～70cmで、直径16cm前後の柱痕跡がある。溝溝は住居の南西隅を中心に幅16cm、深さ7cm前後のものが2.3mの範囲で検出されたのみで、壁面に沿って全周しないようである。南東壁中央付近の床面には、長軸180cm、短軸53cm、深さ23cmの不定形な土坑が形成されている。床面の中央部には直径約56cm、深さ10cmの円形を呈した炉があり、炉の底には炭化物の薄層の堆積が認められた。この炭化物層から微量のイネの種子が検出されている。床面は極めてシンプルで、これら以外に特に床面施設は設けられていない。

本住居ではおそらく廃絶に伴い、土器など生活用品の徹底した搬出が行われたものと思われ、住居床面上、および埋土の下層からは全く遺物の出土が認められなかった。このため住居の経営時期を示す土器資料に恵まれないが、住居を被覆する埋土の上層からは土器がまとまって検出されている(Fig.240)。これらの土器は住居の南西側の壁際に集中しており、いずれも標高7.6m前後、住居の床面から50cmの厚さで堆積をみせる埋土の上で、面的な広がりをみせていた。こうした出土状況から、住居の埋土中に特定の面の存在が想定され、この面上に土器溜のような形で形成された土器群と思われる。従ってこの一群の土器は本住居と直ちに関連をもつものではない。

2. 遺物(Fig.241, PL.116)

住居埋土上層から出土した土器には、壺(1561～1567)、壺(1575～1579)、高杯(1574)、小形器台(1569～1571)、鉢(1568)、有段口縁鉢(1572・1573)などの器種がある。

1561～1563は庄内式壺Aである。いずれも遺存状態はあまり良くなく、1563の肩部外面に辛うじて細かいタキ成形痕が認められる程度である。1564～1566は布留式祖形壺である。口縁部が内湾気味に開くと共に、口縁端部を僅かに内側に拡張する1564・1565、口縁部がやや外反し、体部をハケで仕上げた

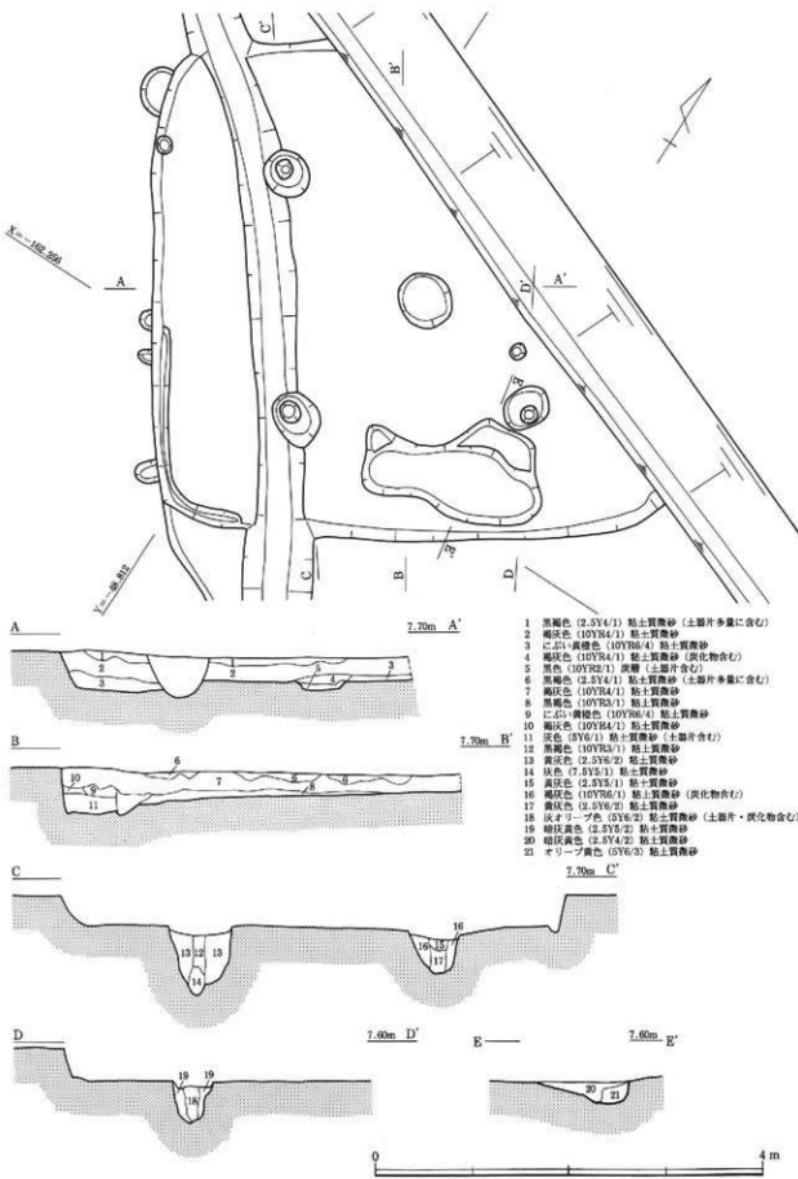


Fig. 239 S A2220平面図・断面図

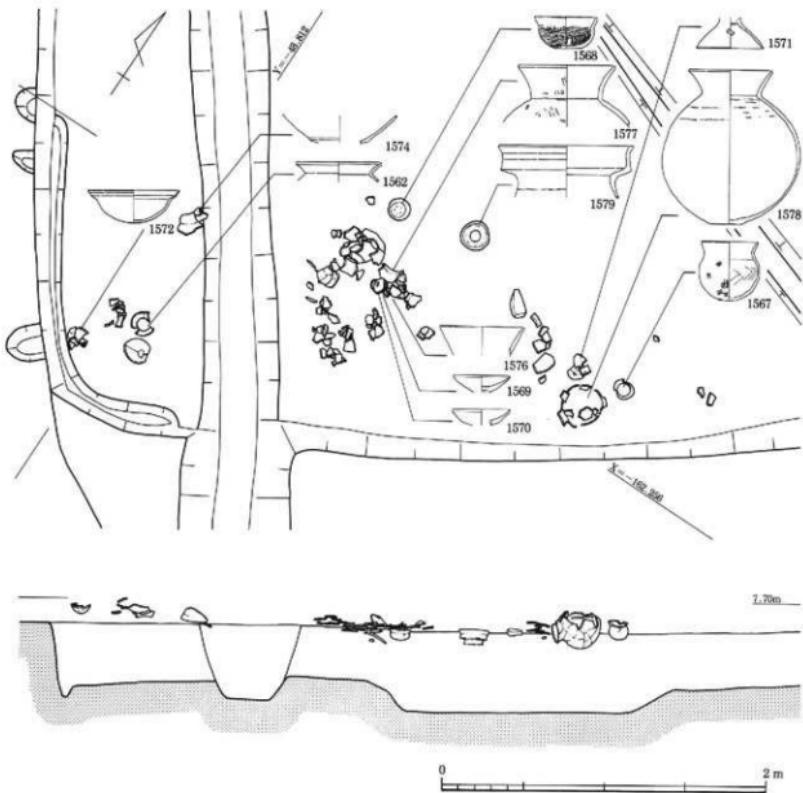


Fig. 240 S A 2220遺物出土状況図

1566がある。1567は体部外面に疎らなハケ調整を施した粗製で小形の壺Xである。

壺には1575～1578の直口壺、1579の複合口縁壺がある。直口壺は口縁部が直線的に立ち上がる1575、口縁部にやや外反傾向のある1576～1578がある。いずれも直口壺の中ではやや口縁部が短い。1579は内傾する頸部から強く外反する受部をもち、さらに受部から垂直に近い角度で外反気味に立ち上がる口縁部を備えた阿波系の複合口縁壺である。胎土に結晶片岩が含まれる。外来系土器I類。

口縁端部を欠失した有段高杯Aの1574は、水平に近い体部から直線的に外上方に延びる口縁部をもつ。1568は浅い体部から屈曲して外上方に短く延びた口縁部を備えた鉢Xで、内外面に横方向のミガキAが認められる。底面に平坦面を認めるが、ほぼ体部と一体化している。

1569・1571は小形器台Bで、おそらく1570もBに属すると思われる。1569・1570の口縁端部はやや上方に拡張されている。

1572・1573は有段口縁鉢で、1572は丸底の浅い体部をもち、また両者とも口縁有段部の屈曲はかなり緩やかである。

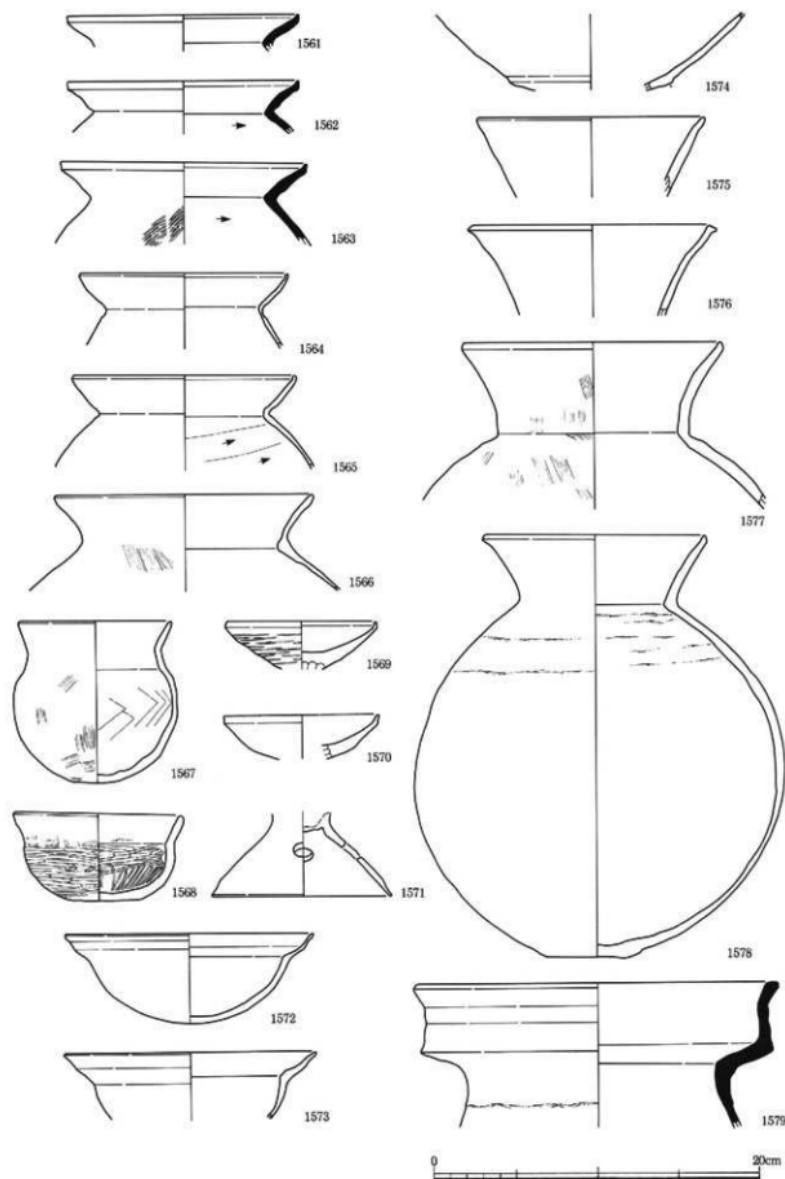


Fig. 241 S A 2220出土遺物実測図

S A2221

1. 造構(Fig. 242, PL.30)

B-2区、C13UA周辺に位置する円形堅穴住居で、VI層を基盤層として検出された。検出標高は7.5mである。住居の上をほぼ南北方向に現代の農業用水路が横断していたため、水路からの漏水が激しく精査は困難を極め、全容は不明な点が多い。住居は用水路を挟んで両側で検出されているが、東側は河道N R 2210によって大きく削られ、また輪郭も判然としなかった。用水路の西側では不整円形を呈した輪郭の一部が検出され、復原的に導かれる住居平面プランの直径は約9.0mと推定される。床面から検出面までの高さは約25cmである。床面上には粗く同心円状に2~3条の溝が巡るようであるが、明確にできなかった。従ってこれらの溝が住居の拡張、あるいは屋内高床部に伴うものなのか判然としない。最内部を巡る溝の周囲には5カ所のピットが検出されているが、この中に柱穴が含まれるのであろう。

住居床面には全く遺物が認められず、埋土から若干量の土器片が出土した。いずれも細片である。

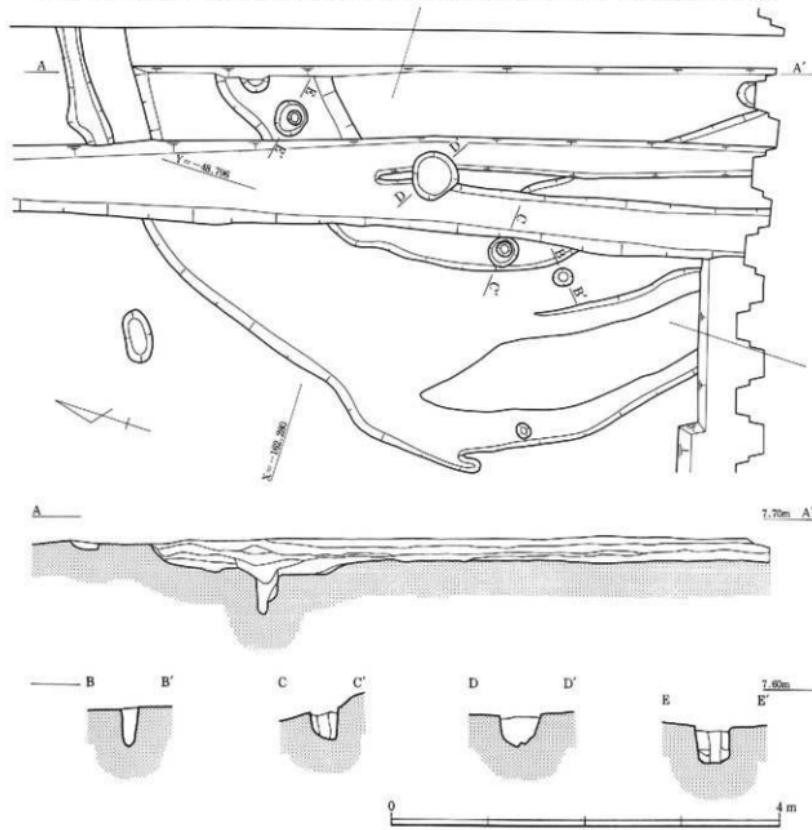


Fig. 242 S A2221平面図・断面図

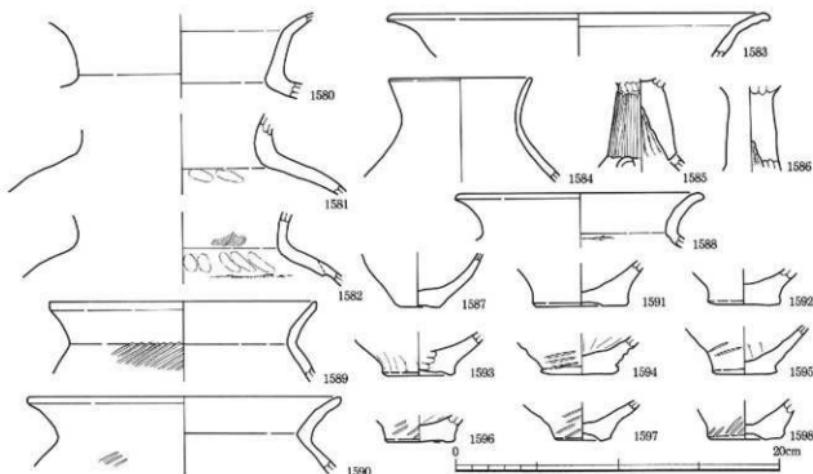


Fig. 243 S A2221出土遺物実測図

2. 遺物 (Fig. 243)

埋土から出土した土器の器種には、壺(1580～1584), 壺(1588～1590), 高杯(1585・1586), 鉢(1587)で、その他に底部(1591～1598)がある。

壺1580～1582は口縁端部を失っているため、如何なる分類に属するか不明である。1583は口縁部が大きく外反するが、普遍的な広口壺ではないようである。あるいは壺以外の器種の可能性もある。1584は頸部のくびれが緩やかな壺Xである。

1588～1590はいずれも弥生形壺Aである。

高杯1585・1586は脚柱部のみの破片でいずれも器壁が厚い。1585は中空であるが、1586はややよく絞られており、中空部分が狭く柱状の外形を呈する。

1587は突出しない平底をもつ鉢で、口縁部を失っている。

1591～1598は平底あるいはドーナツ状の底で、壺・壺の底部であろう。

S A2222

1. 遺構 (Fig. 244, PL.30)

B-2区、C13Q B周辺に位置する方形堅穴住居で、VI層を基盤層として平面プランは比較的明瞭に検出された。検出標高は7.6mである。住居の東半部はN R2210に、また南半部はS A2223にそれぞれ大きく切られており、北西隅の周辺が残存するのみである。従って正確な法量は不明であるが、残存長は南北2.9m、東西1.6mで、床面から検出面までの高さは10cmである。残存する西壁の一部からみた方位はN-16°-Wを示す。壁面はほぼ直線的に掘られているが、北西の隅角部は壁面からやや張り出している。床面は基盤層を掘込んではほぼ平坦に成形されており、貼床などは全く施されていなかった。また柱穴、壁溝その他の住居関連施設は全く認められなかった。

2. 遺物 (Fig. 245)

住居床面からは全く遺物は検出されなかった。僅かに住居埋土から底部(1599)、庄内式壺A(1600)の

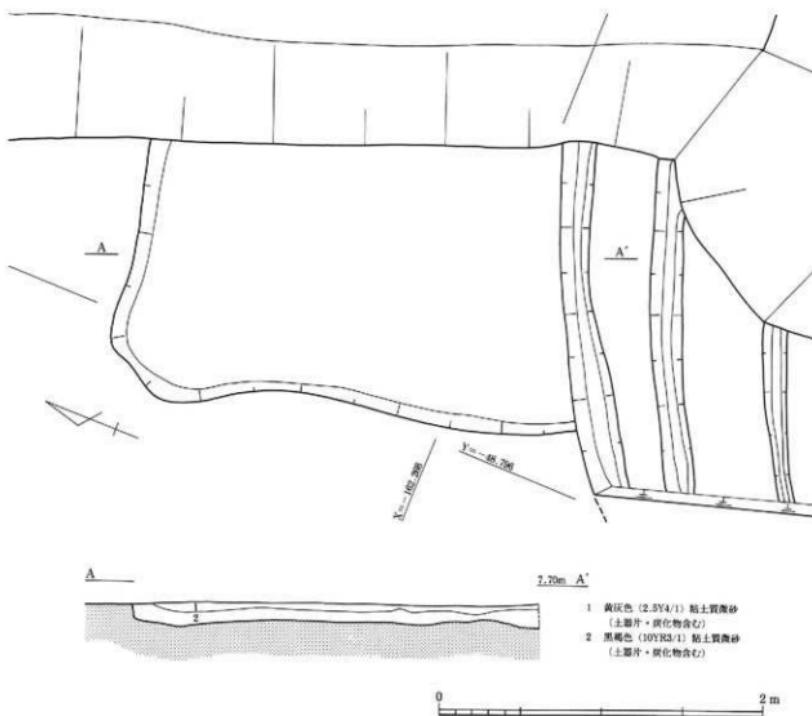


Fig. 244 S A 2222 平面図・断面図

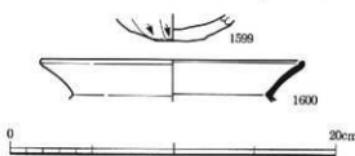


Fig. 245 S A 2222 出土遺物実測図

S A 2223

1. 遺構 (Fig. 246, PL.30)

B-2区、C13RB周辺に位置する方形堅穴住居で、VI層を基盤層として平面プランは比較的明瞭に検出された。検出標高は7.6mである。北側部分でS A2222を切っているが、東側はN R2210に大きく削られ、また西側の壁の直上には農業用水路が走るため、遺存状態は良好とはいえない全容は知り得ない。南北の壁溝は3重に巡っており、2度にわたって外側へ住居の拡張が行われたと考えられる。その各過程を1~3次住居として把握すると、その南北の軸長は1次住居が4.4m、2次住居が5.3m、3次住居が6.2mである。また拡張に伴って床面も6~12cmまで嵩上げされている。壁溝は各段階の住居平面プランそれぞれの外周に伴っており、壁溝の規模はいずれも幅25cm、深さ20cm前後であった。床面北西部

破片が出土している。

1599の底部は狭く突出しない平底をもち、その脚部最下端に縦方向のケズリを加える。体部が球形に近い壺の底部であろうか。

1600の庄内式壺Aは口縁部のみの破片で、口縁端部の拡張があまく、やや丸味を帯びている。

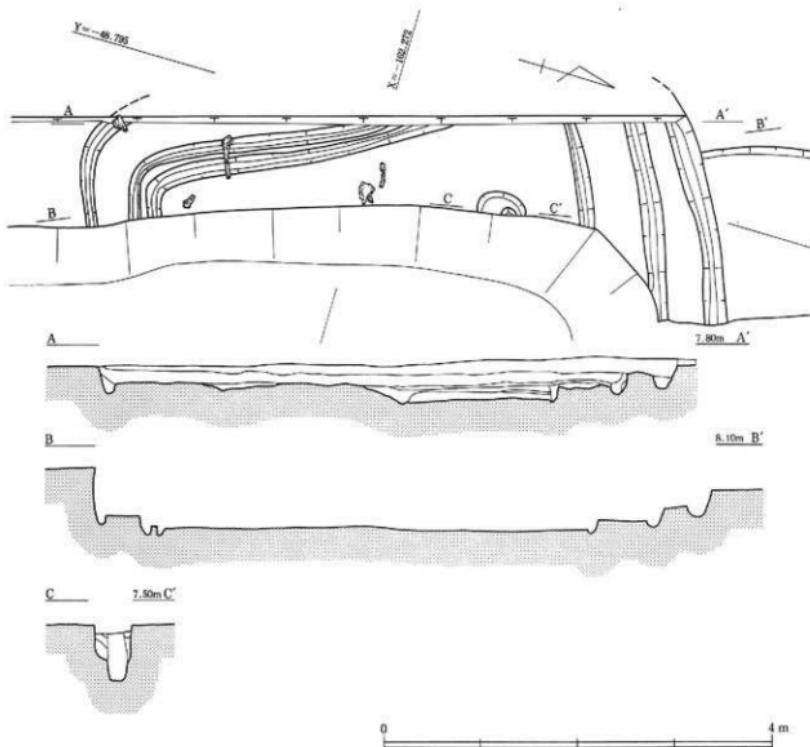


Fig. 246 S A2223平面図・断面図

に柱穴が1ヵ所確認された。この柱穴はN R 2210によって東半部が半裁されている。掘形の残存部分の直径は45cm、深さは55cmである。また直径20cmの柱痕跡も認められた。3次住居の床面には炭化材の分布をみると、いずれも小破片で量的にも少ない。床面には全く土器を伴っておらず、住居埋土から若干の土器片の出土があった。

2. 遺物(Fig. 247)

埋土から出土した土器には、壺(1601)、高杯(1602~1605)、甕(1606~1610)、製塩土器(1611)などがあり、時期幅が認められる。

1601は複合口縁壺である。直立する頸部からやや外反する受部をもち、それに続く口縁部は鈍重な作りで外面にミガキAを施している。

1602は布留系高杯で、体部外面はハケ、口縁部内外面はナデ。高杯脚部には弥生形の1603、布留形の1604・1605がある。

甕では1606が弥生形甕底部であるが、その他は布留式系統の甕である。口縁部のみの破片のため詳細は不明であるが、1607は布留式祖形甕、1608~1610は布留式甕と思われる。

1611は細片であるが、低い脚台をもつ製塩土器Bであろう。

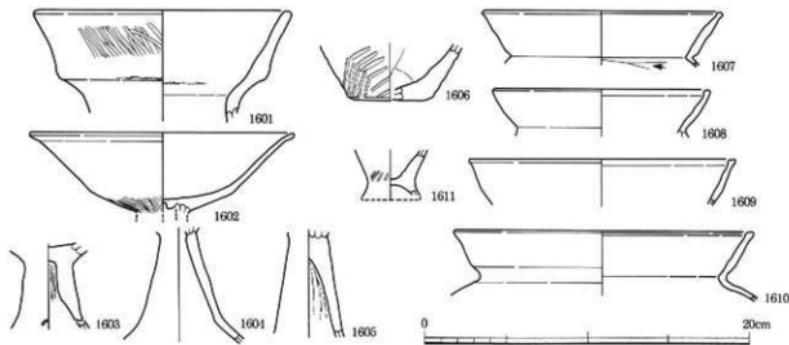


Fig. 247 S A 2223出土遺物実測図

S A2224

1. 遺構 (Fig. 248, PL. 30)

B-2区、C12Q O周辺に位置する方形竪穴住居で、VI層を基盤層として検出された。検出標高は7.7mである。B区の最北西端に位置し部分的な検出に留まるが、B地区では大溝S D2206の西側で検出された唯一の竪穴住居である。検出されたのは住居の南東隅を含む一部のみであり、南東壁面からみ

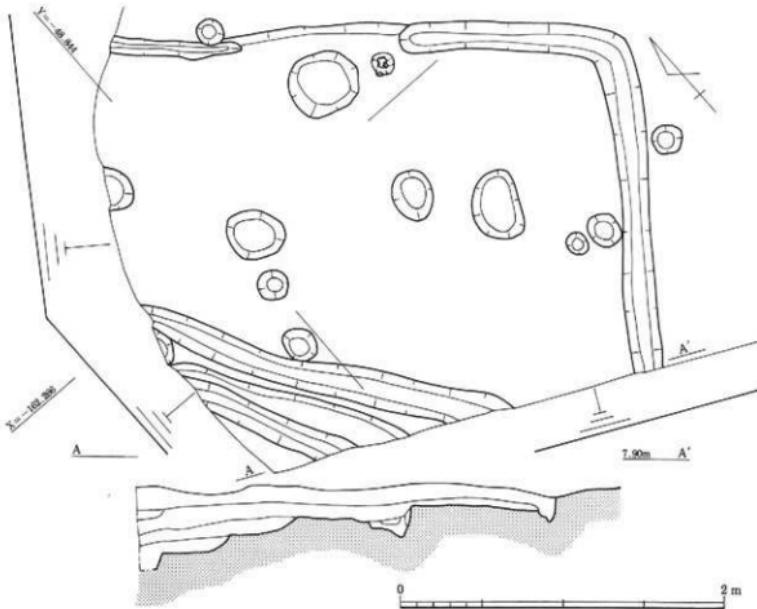


Fig. 248 S A 2224平面図・断面図

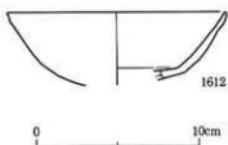


Fig. 249 S A2224出土遺物実測図

た方位はN-54°-Eである。床面には大小の土坑・ピットが確認されたがいずれも浅く、住居に直接関わる確証は得られない。また柱穴も検出されなかった。検出長は北東壁が3.1m、南西壁が2.4mで、床面から検出面までの高さは16cmであった。壁面に沿って部分的に幅20cm、深さ14cmの壁溝が認められたが全周しないようである。

住居の西側にはほぼ同じ方向に走行する2条の溝が認められ、また溝の部分で床面のレベルが約50cm下がることから改築の痕跡、もしくは他住居との切合いの可能性が考えられる。これらの溝の上を堆積土もしくは置土が覆っていることから、住居の拡張であればS A2224の主要検出部分が拡張部であり、また住居の切合いであればS A2224が先行する住居を切って形成されたことになる。しかし溝の走行する方位はS A2224の北東壁と比較して東へ約15°前後のずれを有しており、拡張よりむしろ住居が切合っている公算が高いと思われる。

出土遺物は極めて少ない。床面では北東壁に近い箇所から高杯1612が口縁を伏せた状態で出土した以外、若干量の細片が検出されたのみである。埋土からは土器細片の出土すらほとんどなかった。

2. 遺物 (Fig. 249)

高杯Xの1612は杯部の破片で、水平に近い体部はごく緩やかな稜線で区画され、口縁部は僅かに内湾しながら長く開く。

S A2125

1. 遺構 (Fig. 250, PL. 31)

B-1区、C13W J周辺に位置する方形堅穴住居で、VI層を基盤層として検出されたが、全体的に遺存状態が不良で輪郭はやや不明瞭であった。検出標高は7.3mである。調査手順の都合により、調査区を反転して2次にわたる掘削が行われ、その両部分にまたがって検出されている。西側の端はN R2210によって削られ、また北側は調査区外に及ぶために全容は明らかにできない。現存する遺構の長さは南壁6.5m、東壁5.2mであった。また壁面は大きく削平されて浅く、検出面からの深さは13cmを測るに過ぎない。主軸はN-29°-Wである。床面にはピット、溝、土坑がみられたが、住居自体の遺存状態が良好ではなかったため、住居に直接伴う施設の特定は困難である。ピットのうち住居の各隅に近い位置にあるものは主柱穴となる可能性が高いが、東側の2柱穴を除いてその特定はできない。東側の主柱穴の掘形は直径36~56cm、深さ29~48cm、柱痕跡の直径は23cm前後である。

その他、住居南壁中央付近の土坑S K2185、及び床面に認められる溝は住居に伴う遺構と考えられる。S K2185は長軸125cm、短軸75cmの不定形な形状で、特にその中央部の径40cm前後の範囲が深くなっている。床面から土坑最深部までの深さは50cmであった。壁溝は西辺と南辺の一部に認められた。溝の幅は20cm、深さは10cm前後である。東壁には幅80cm、高さ10cmの屋内高床部がある。屋内高床部は北辺にも痕跡的に存在するが、明瞭に検出することができなかつた。屋内高床部は西辺には認められないが、S K2185を住居の中軸線が通過すると想定すれば、東辺の高床部とほぼ左右対称の位置に、溝が東壁と平行して走行する。この溝は住居内での位置関係からみて、調査では確認できなかつた住居西側高床部の存在を示すものかも知れない。従って本住居は北・東・西の少なくとも3方に屋内高床部が存在していた可能性がある。

土器はS K2185の埋土から壺1614が検出された以外は、すべて住居埋土から出土した。土器の全体量は僅少である。

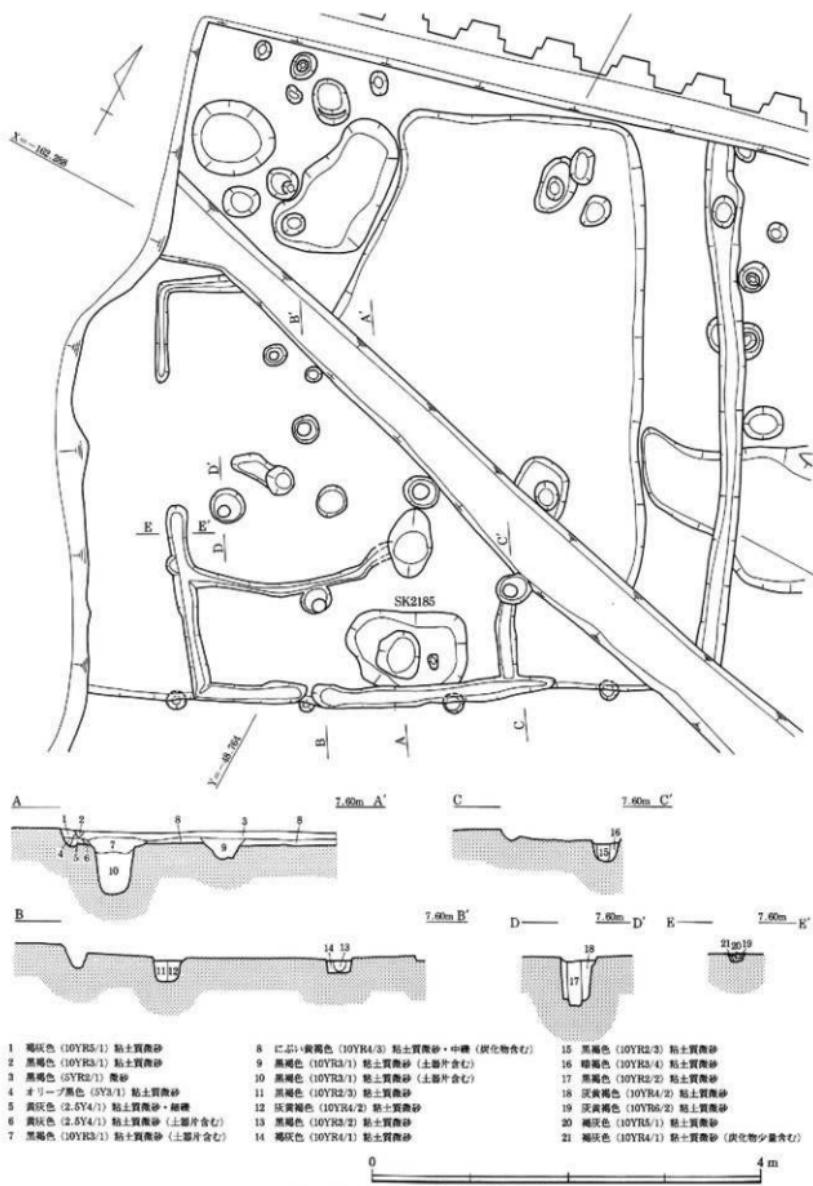


Fig. 250 S A 2125平面図・断面図

2. 遺物(Fig. 251)

出土土器の器種には、壺(1613・1614)、底部(1615)、高杯(1616)がある。

壺はいずれも水平に近い右上がりのタキ成形痕を残した弥生形壺Aである。口縁部は頸部から緩やかに外反し、端部を丸くおさめている。

1615は球形の体部に突出しない平底をもつ。壺の底部であろう。

1616は高杯脚柱部の上半の破片である。杯部形態は不明で、杯部と脚柱部

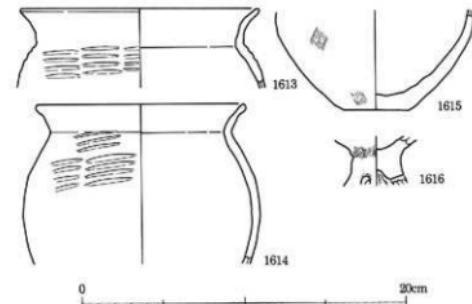


Fig. 251 S A2125出土遺物実測図

の境界にハケ調整がみられる。透かしの位置から比較的低脚の高杯と思われる。

S A2326

1. 遺構(Fig. 252, PL. 31)

B-3区、C13R L周辺に位置する方形堅穴住居で、VI層を基盤層として検出されている。検出標高

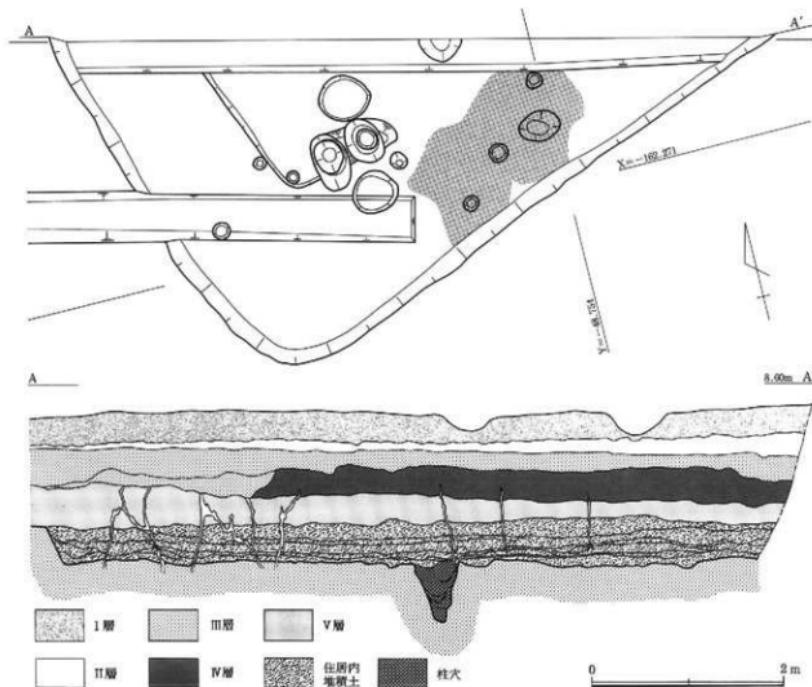


Fig. 252 S A2326平面図・断面図

は8.4mである。大半が調査区の北側に及んでおり、住居南西隅の一部が検出されたに留まる。検出長は西壁4.3m、南壁6.2mで、床面から検出面までの高さは40cmであった。西壁から主軸をみた場合の方位は、N-18°-Wである。南壁付近床面のほぼ中央に、長軸200cm、短軸83cmの不定形な範囲で細かい砂礫が分布する。床面に貼床は認められなかった。床面には大小のピットが存在するが、確実に柱穴と考えられるものは、調査区の端部で断面にかかるて検出されたピットのみである。この柱穴は直径43cm、床面からの深さ60cmである。住居の西壁に沿った床面には、幅116cm前後のごく低い帯状隆起がある、これが屋内高床部の痕跡の可能性もある。しかしこの高低差は1~2cmに過ぎず、積極的に評価できない。以上のほかに、土坑、壁溝など住居施設の存在は全く認められなかった。なお本住居では、基盤層から住居埋土を貫いて、その上層の堆積土まで至っている多数の噴砂痕跡が認められた。

2. 遺物(Fig. 253)

住居埋土から壺(1617)、底部(1618~1624)が出土した。

1617は口縁部外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させた壺である。

底部の破片のうち、1618~1620は壺、1621~1624は壺と思われる。いずれも底部形態A、あるいはBの平底である。

S A 1127

1. 遺構(Fig. 254, PL. 32)

A-1区、C12MH周辺に位置する方形堅穴住居である。立地的にはN R1104の左岸にあるが、S A 1127が営まれた段階では、N R1104はほぼ完全に埋没していたと考えられる。住居周辺にはVI層は存在しておらず、N R1104河畔の堆積層に検出面をもつ。住居は東側の一部が調査区外に及んでいて全容は明らかでない。その規模は西壁3.8m、北壁3.4m以上、床面の深さは検出面から約21cmで、検出標高は7.4mであった。平面プランは方形を基本とするが、北西隅が西側にやや張り出している。主軸方向はN-66°-Wである。住居掘形にはかなりの凹凸が認められるが、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土質微砂を3~12cmの厚さで敷き均して貼床とし、水平に近い状態の生活面が形成されている。住居の北壁、南壁に沿って幅21cm、深さ6cm前後の壁溝が巡る。

西壁の中央北寄りの位置には竈が設けられ、基底部付近の高さ6cmの部分が残存する(Fig. 255)。袖の形状は壁面から「ハ」字状に延びるが、その長さは南63cm、北45cmで、南側袖がやや長く作られ、また竈の主軸は壁面から直角ではなく焚口がやや北側に張っている。竈の設置にあたっては、貼床と異なる微砂を充填し、その両側に袖を構築している。また竈直下には、貼床構築に先行して敷かれた微砂層が認められ、竈の設置が住居の設計当初から予定されていたことを暗示している。燃焼部は長軸61cm、短軸42cmのV字状を呈し、炭屑が燃焼部の全域と前庭部から南側にかけて広がりをみせる。燃焼部の奥には支脚に転用された有蓋高杯(1633)が倒立状態で設置されていた。またその前方からは、杯蓋(1625)が口縁部を上に向かた状態で出土し、その周囲は上で固定されていたことから、意図的に設置されたも

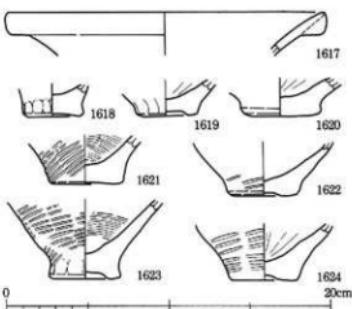


Fig. 253 S A 2326出土遺物実測図

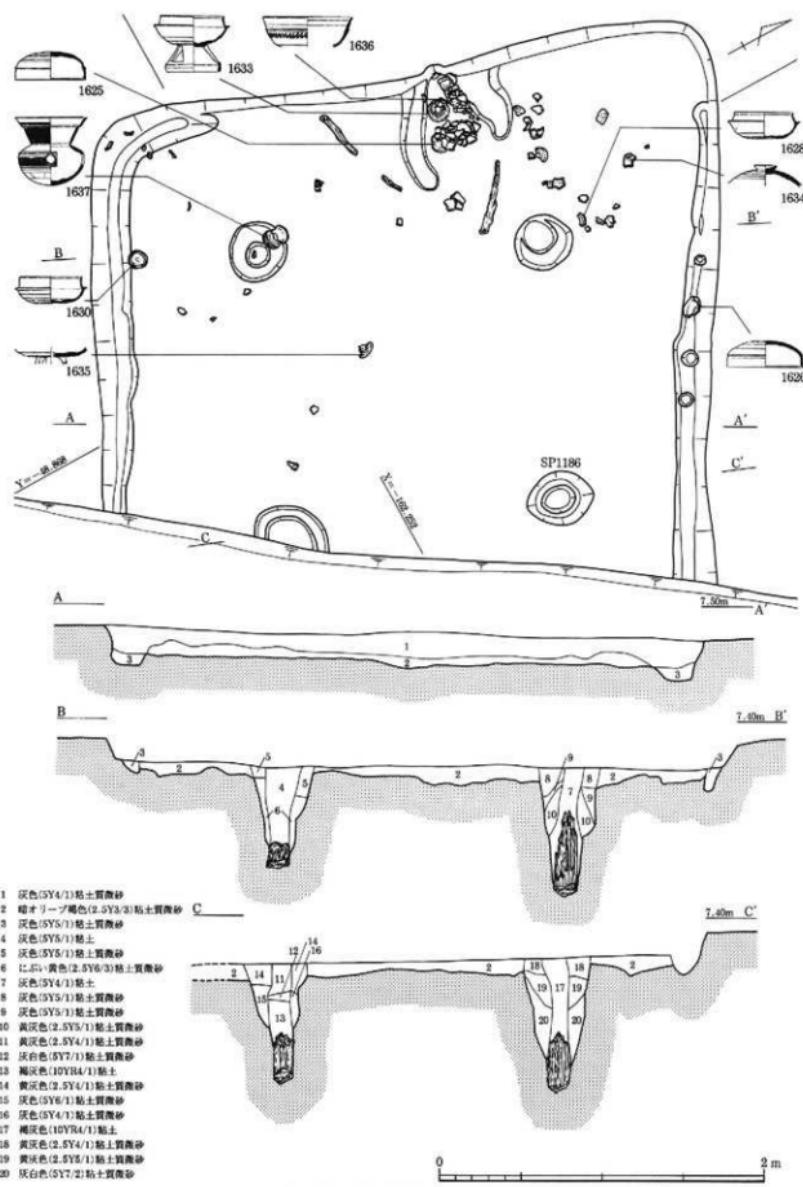


Fig. 254 SA1127平面図・断面図

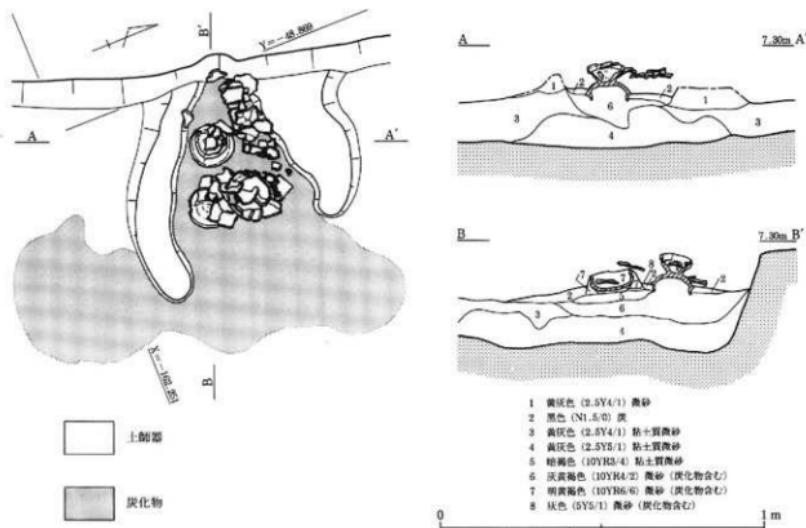


Fig. 255 S A1127 立面平面図・断面図

のと考えられる。これら2点の須恵器の上を覆うように、土師器壺の細片が面的に分布していた。

主柱穴は4カ所に認められた。掘形は貼床面から切り込まれており、径は30~45cm、床面からの深さは54~73cmである。遺存状態にはそれぞれ格差が認められるが、すべての主柱穴の内部には柱根が残されていた(Fig. 256)。柱根はツブラジイの心もち丸太材を素材としている。下端部はほぼ水平、もしくは純角に切断されて柱穴底面に接する。礎板は認められなかったが、樹皮を数枚重ねて底面に敷き込んだ主柱穴が存在した。W184は住居の北東側に位置するS P1186の柱根で、法量は直径12cm、長さ29cmである。下端部には手斧痕が残り、上端は砲弾状に木が痩せている。側面にはほとんど加工の手が加えられていないよう、表面には樹皮の残存が認められた。しかし樹皮部分はいずれも遺存状態が不良で、取り上げ時にすべて剥離脱落した。

遺物は住居の西半部に分布がみられるが、甌、床面、壁溝、主柱穴掘形上層など、分散して出土した。すべて須恵器・土師器であるが、土師器は磨耗が著しく復元できなかった。

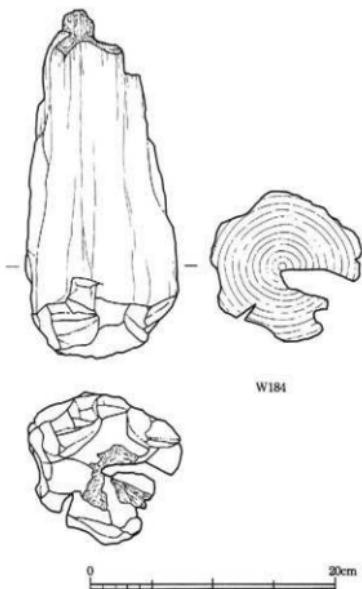


Fig. 256 S P1186 柱根実測図

2. 遺物(Fig. 257, PL. 117)

出土した須恵器の器種には、杯蓋(1625~1627・1631)、高杯蓋(1634)、杯身(1628~1630・1632)、高杯(1633・1635・1636)、甌(1637)がある。

杯蓋はいずれも口縁部と天井部の境界に明瞭な稜線を有し、天井部は広い範囲で回転ヘラケズリが加えられ、また丸味を帯びている。口縁端部はいずれも内傾する凹面をもつ。1625は甌の燃焼面、1626は壁溝上面から検出され、それ以外の1627・1631は埋土下層から出土した。

1634の高杯蓋は、丸味を帯びた天井部の頂上に、中央部が凹んだつまみを附加している。床面直上から出土した。

杯身1628~1630・1632の底部に施された回転ヘラケズリは、いずれも広い範囲に及ぶ。また口縁部はやや内傾して立ち上がり、口縁端部に内傾する端面をもつ点で共通した特徴を備える。1629が壁溝から検出された以外は、床面直上からの出土である。

高杯のうち、1633が有蓋高杯、他の2点が無蓋高杯である。1633は甌の支脚として用いられた個体で、杯部は回転ヘラケズリの範囲が広く、また口縁端部に内傾する凹面をもつなど、他の杯身とほぼ同様の特徴を備える。脚部は三角形3方透かしで低脚のものである。1635は杯部体部の一部と脚部の一部を残す破片で、脚部に長方形透かしがみられる。1636の無蓋高杯は楕形で口縁部が開く杯部をもつ。口縁部と体部とは凸線によって区画されている。凸線直下の体部外面に1条の波状紋を巡らせる。1635は床面直上から出土した。

甌1637は扁球状でやや肩の張った体部に、比較的短い口縁部を備える。体部中央に上下2条の凹線を設けて紋様帶とし、内部に列点紋を飾る。口縁部は細かい波状紋で飾られる。柱穴に近接した床面直上から出土した。

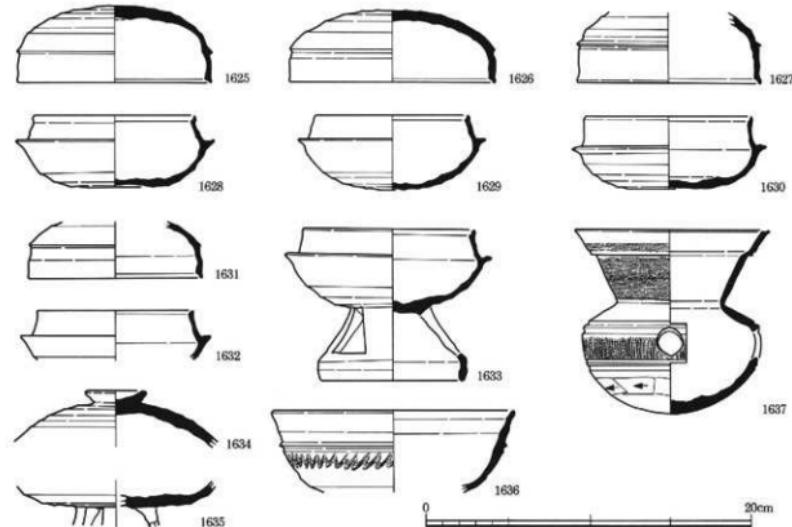


Fig. 257 SA1127出土遺物実測図

S B 2228

遺構(Fig. 258, PL.33)

B-2区, C12RQ付近で検出された掘立柱建物である。南側の一部が調査区外に及んでおり全容は不明であるが、梁間2間、桁行3間の南北棟、側柱建物と推定される。梁間長は3.2m、桁行長は4.6mで、主軸はN-3°-Eである。標高7.0~7.6mのVI層上面で検出されたが、SD2206の西側肩斜面部に柱穴が認められることから、本来はSD2206の最終堆積土の上から形成されていた可能性がある。柱穴掘形は円形で、直径は24cm、深さは32cm前後である。遺物は全く出土しなかった。

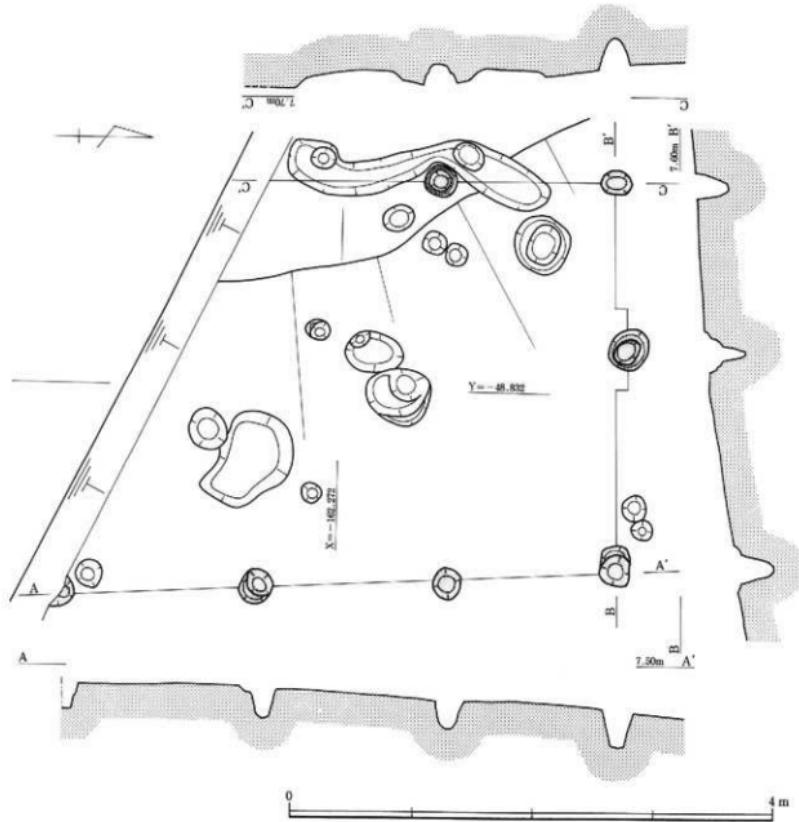


Fig. 258 S B 2228 平面図・断面図

S B 2229

1. 遺構(Fig. 259, PL.33)

B-2区, C12QV付近で検出された掘立柱建物で、SA2217の東側に隣接した位置にある。梁間2間、桁行2間の南北棟の側柱建物であるが、南側では中央の側柱を欠いているので、外見上は1間であ

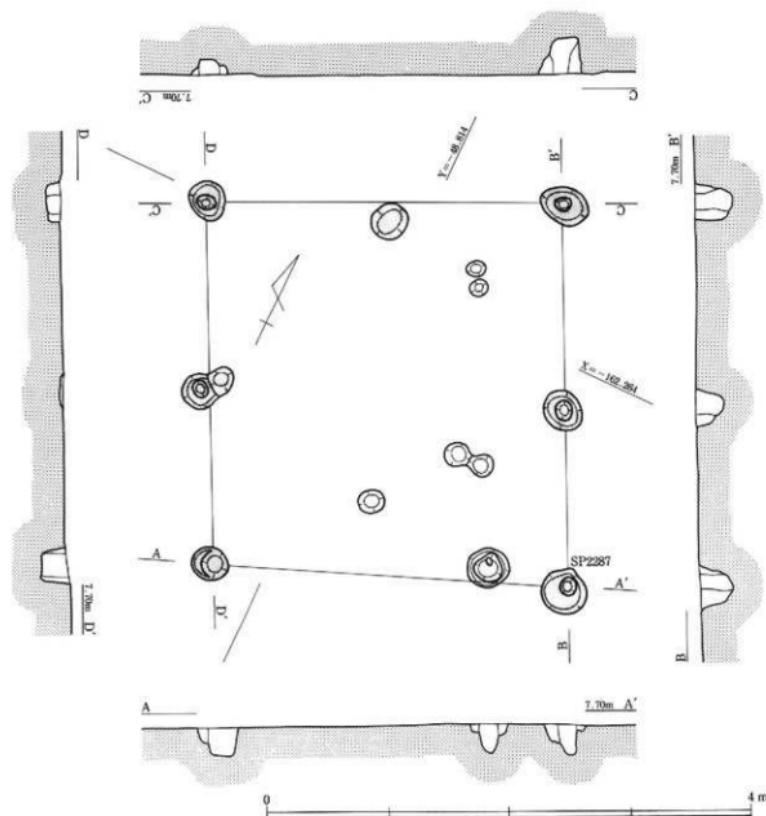


Fig. 259 S B 2229平面図・断面図

る。梁間長は2.9m、桁行長は3.0mで、主軸はN-25°-Wである。標高7.6mのVI層上面で検出された。柱穴掘形はいずれも円形で、直径は32cm、深さは28cm前後、柱痕跡の径は12~16cmである。遺物としては、建物の南東隅に位置する柱穴S P 2287の埋土中から、鉢(1638)が出土している。

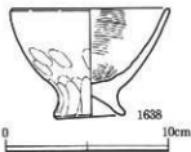


Fig. 260 S P 2287出土遺物実測図

2. 遺物(Fig. 260, PL.117)

1638は上げ底状に下部が開く底部をもった小型鉢Bである。外面はナデ、内面はハケで仕上げる。

S B 2330

遺構(Fig. 261, PL.33)

B-3区、C13RH付近で検出された掘立柱建物である。西側の一部が調査区外に及んでおり全容は不明であるが、梁間2間、桁行2間以上の東西棟、総柱建物と推定される。梁間長は2.7m、桁行長は

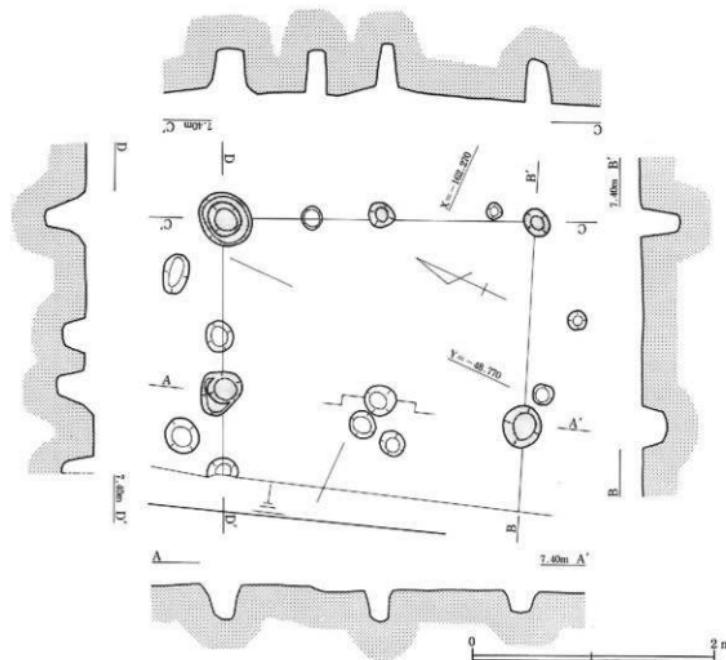


Fig. 261 S B 2330平面図・断面図

1間1.4~1.7mで、主軸はN-22°-Eである。標高7.3mのVI層上面で検出された。柱穴掘形は円形で、直径は24cm、深さは32cm前後である。遺物は全く出土しなかった。

S B 2331

遺構(Fig. 262, PL.33)

B-3区、C13S I付近で検出された掘立柱建物で、梁間1間、桁行4間の南北棟、側柱建物と推定される。標高7.1~7.2mのVI層上面で検出された。梁間長は3.3m、桁行長は4.7mで、主軸はN-3°-Wである。桁行の柱間は1間あたり1.1m前後でやや狭い。柱穴は円形の掘形をもち、直径は20cm、深さは48cmで、かなりしっかりしている。直径12cm前後の柱痕跡も、多くの柱穴で残されていた。遺物は全く出土しなかった。

S B 2332

遺構(Fig. 262, PL.33)

B-3区、C13S J付近で検出された掘立柱建物である。S B 2331とはほぼ同規模で、一部が重複しながら東側に構築されている。梁間2間、桁行3間の南北棟、側柱建物と推定される。なお南側の梁間は2間であるが、北側では中央の側柱を欠いているので、外見上は1間である。梁間長は3.2m、桁行長は4.8mで、主軸はN-14°-Wである。標高7.1~7.2mのVI層上面で検出された。柱穴は円形の掘形をもち、直径は28cm、深さは48cmで、柱痕跡の直径は12cm前後である。遺物は全く出土しなかった。

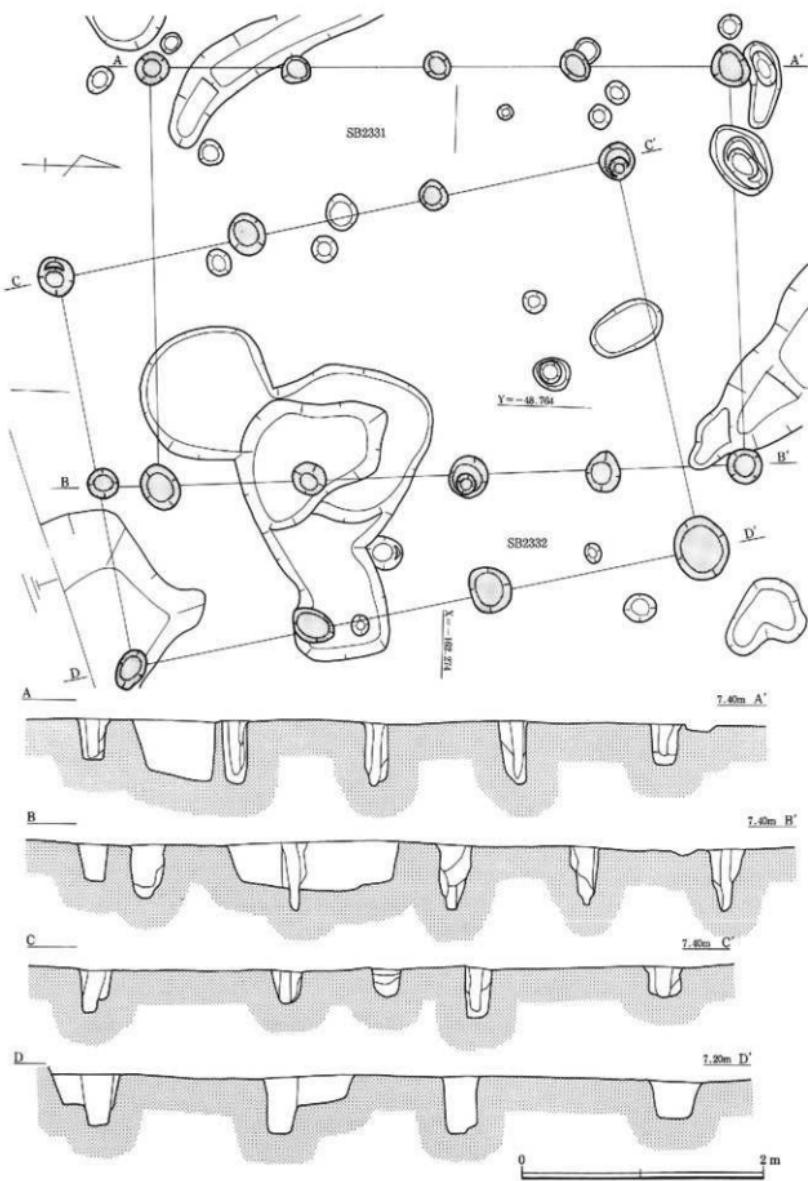


Fig. 262 S B2331・2332平面図・断面図

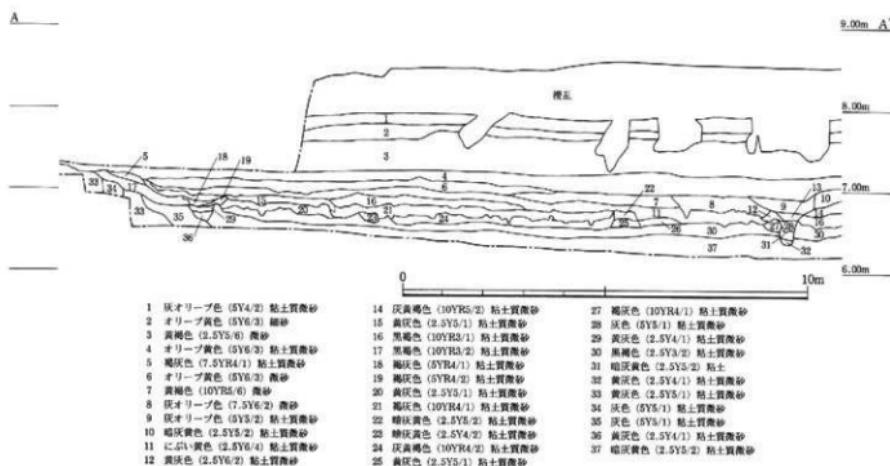
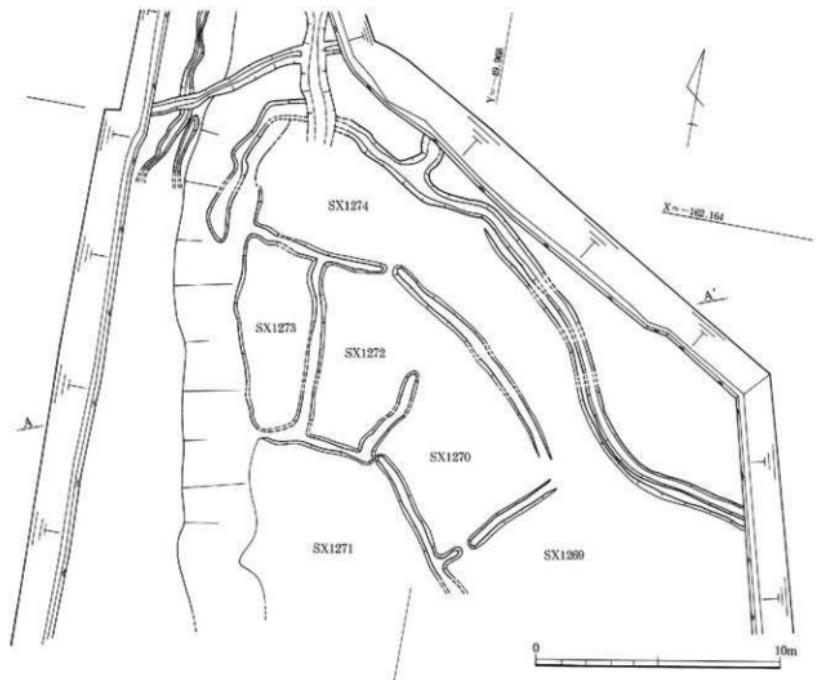


Fig. 263 S X 1269~1274平面図・断面図

S X1269～1274

遺構 (Fig. 263・264, PL.34)

A-2区、C06S I付近を中心として検出された水田遺構である。A-2区では調査区の西側、及び北側は微高地状に隆起しており、その南側は地形的にやや落ち込んでいる。この比高差は約0.4mで、低い部分に畦畔によって区切られた少なくとも6面の小区画水田が確認された。それぞれの小区画をS X1269～1274と称する。断面観察から明確な水田遺構として確認されたのは1層のみで、その上面の標高は6.8mである。耕土の厚みは12cmで、その下位には床土層が認められ、床土層の上面には踏み込み痕跡と思われる起伏が観察された。

畦畔は床土層から盛土によって幅60cm、高さ10cm前後の断面台形に形成されている。水田面の認識に先行して遺構の検出を終えた調査区の南端 (N R1207検出地点)では、畦畔を確認することができなかつたが、本来はこの部分にも水田が広がっていたものと思われる。2条の畦畔が西側の微高地から南東へ弧状を描くように5.3mの幅で設置され、その両者の間をさらに畦畔が部分的に連結し、水田を小区画に分割している。水田の北から東にかけて幅40cm、深さ50～60cmの溝が存在するが、その掘込み面は水田面より上層であるため、水田と溝とは直接的な関連をもたない遺構と考えられる。

S X1273の西側斜面直下には、水田耕土上面にかかるように、部分的な炭化物層の堆積が認められた (Fig. 264)。この炭化物層は肉眼では藁が燃えたように見える纖維状の植物遺存体の集合で、面的に広がるが厚さは極めて薄いものであった。水田遺構の下層の状況については、断割り調査を実施できなかつたので詳細は不明であるが、南端部のトレンチ調査により検出されたN R1207が、そのまま連続して水田の下層を貫いている可能性が高いと思われる。

なお、本遺構に関連する遺物は全く検出されず、考古学的な見地からその經營された時代を明らかにすることができなかつた。しかし、前記のS X1273にみられた炭化物層についてAMS法による¹⁴C年代測定を実施し(試料No. S HM-1-1), 1575±55年の測定結果を得た。すなわち4世紀後半から5世紀後半の実年代が与えられ、少なくとも庄内式併行期と考えられるN R1207が、水田より下層に位置することと層位的な矛盾は生じない。

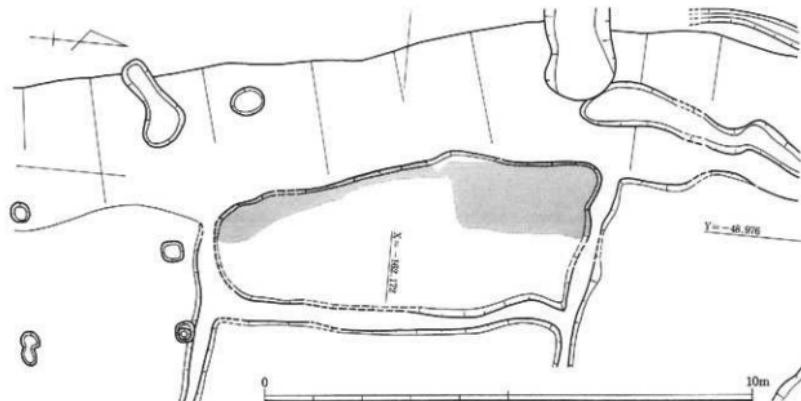


Fig. 264 S X1273炭化物分布状況図

S X 1233

1. 遺構(Fig.265, PL.35)

A-2区、C06S Fで検出された土器棺墓で、VI層を基盤層としている。水田遺構S X1273その他の西側微高地の斜面上に位置する。検出面の標高は7.0mである。調査手順の都合上、当該地区内では調査区を数次にわたり分割し反転しつつ掘削を行ったため、偶然区割りの境界に位置することになり、側溝にかかった状態で検出されている。墓墳は長径70cm、短径52cmの梢円形を呈し、深さは44cmである。壁面はほぼ垂直に掘削されており、底には平坦面が認められる。土器棺は壺(1640)を棺身、甕(1639)を棺蓋として合わせ口に組み合わせ、墓墳中央部分で棺身を約49°傾けた斜方向に設置されていた。棺身の主軸方向はN-16°-Wである。土器棺は削平をほとんど免れており、比較的良好に遺存していた。棺身はほぼ原形のままで完存し、また棺蓋は上面にあたる部分が一部破損しているのみである。壺の最大径部に壺の口縁部がかかるように組み合わされている。いずれもIV様式。

2. 遺物(Fig.266, PL.118)

1639は棺蓋に用いられた甕で、人為的な穿孔や打ち欠きはみられない。体部上半に最大径があり、下

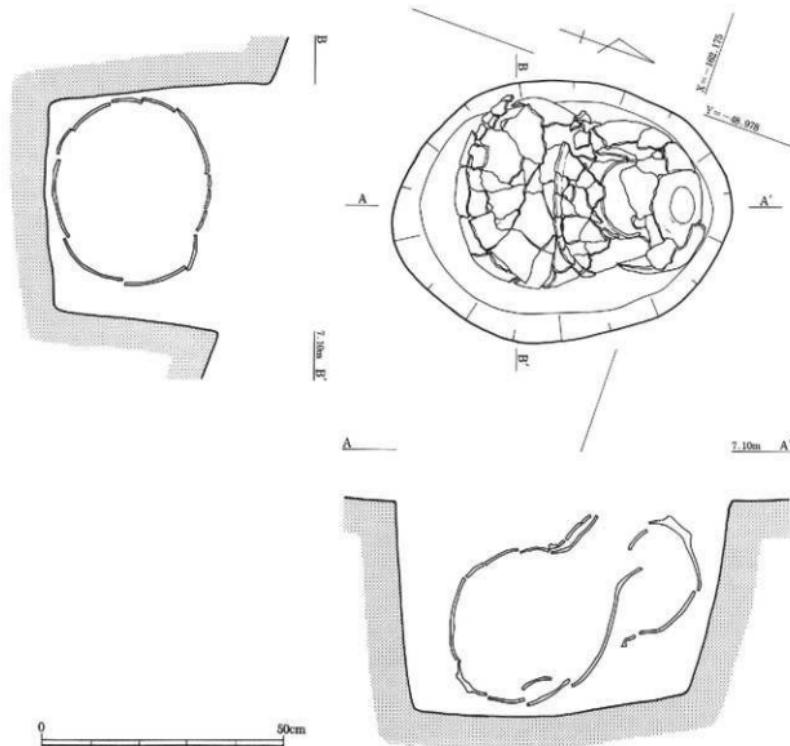


Fig. 265 S X 1233平面図・断面図

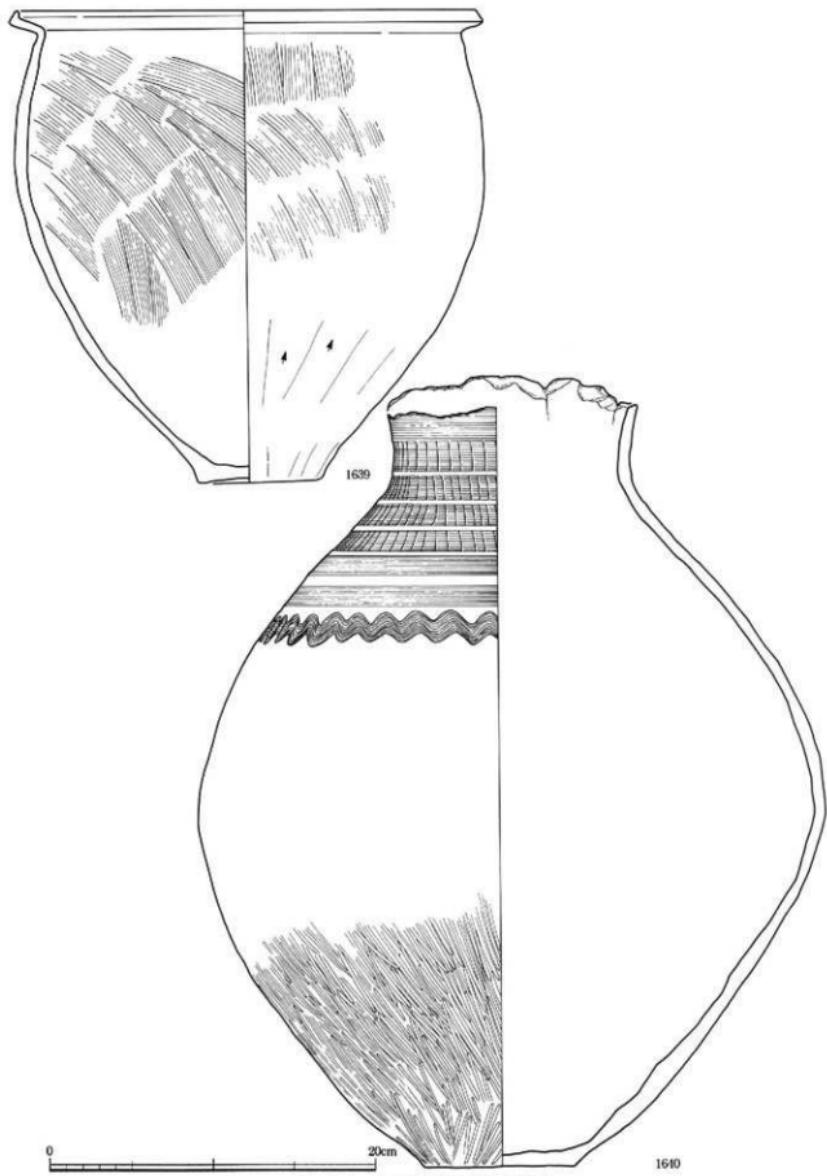


Fig. 266 S X1233出土遺物実測図

半部はなだらかに径を縮めて平底に至る。頸部は強く屈曲し、口縁端部は上方に拡張され端面をもつ。体部外面下半はケズリ、体部上半および内面はハケ調整。

1640は棺身に用いられた壺で、頸部くびれ付近で口縁部が水平に打ち欠かれている。平底で最大径は体部のほぼ中位にある。頸部から肩部にかけて直線紋1条、廉状紋4条、直線紋2条、波状紋1条が連続的に施されている。体部の中位では磨耗しているが、外面には下半から底部にかけてミガキ調整が観察される。

S X 1334

1. 遺構(Fig. 267, PL. 36)

A-3区、C11DVで検出された土器棺墓で、VI層を基盤層としている。検出面の標高は5.9mである。SD1305の東肩付近に位置する。墓壙の輪郭は比較的不明瞭で、遺構の上面から完全な検出を行はなかったが、径59cm前後の不整円形を呈しており、また推定される深さは37cmである。壁面は半球状に掘削されている。土器棺は壺(1642)を棺身、甕(1641)を棺蓋として合わせ口とし、墓壙中央部分で棺身をやや傾けて設置されていた。棺身の主軸方向はN-44°-Wである。土器棺の上部は削平を受けており、棺蓋の底部や棺身の上半部は部分的に損壊している。特に棺蓋は小破片が残存するに過ぎない。棺身は口縁部が意図的に打ち欠きされ、棺蓋の甕を上下逆転して被せている。本来は壺の最大径部に甕の口縁部がかかっていたと考えられるが、検出状況では蓋は原位置からかなりずれが生じているようである。棺底は墓壙底より2cm上有る。土器棺はいずれもIV様式。

2. 遺物(Fig. 268, PL. 118)

1641は棺蓋に用いられた甕で、遺構の削平により底部を失っている他は、人為的な穿孔や打ち欠きはみられない。体部上半に最大径があり、下半部はなだらかに径を縮めて平底に至る。頸部は強く屈曲し、口縁端部は上方に拡張され端面をもつ。体部外面はタタキの後、密な全面ミガキ調整がみられ、体部内面は頸部直下をハケ調整する。

1642は棺身に用いられた壺である。口縁部は水平に打ち欠かれており、頸部以下が残されている。また底部付近の体部側面に、外面から穿った1カ所の穿孔を有する。平底で倒卵形の体部をもち、最大径は体部のほぼ中位にある。頸部から体部上半にかけて廉状紋6条、直線紋1条、波状紋1条を連続的に施す。体部最大径部から底部にかけて密なミガキ調整が観察される。

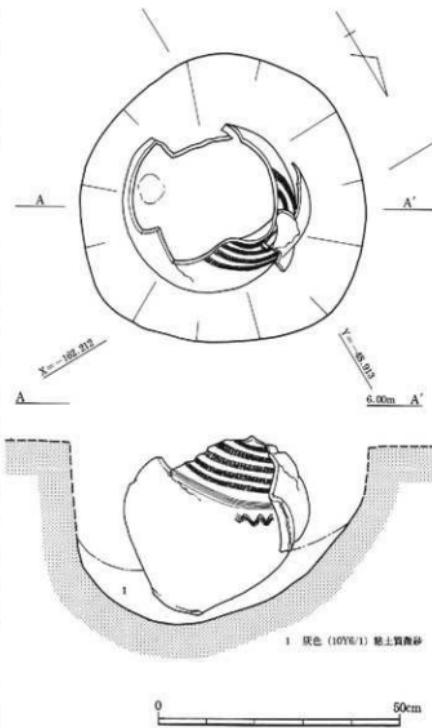


Fig. 267 S X 1334平面図・断面見通図

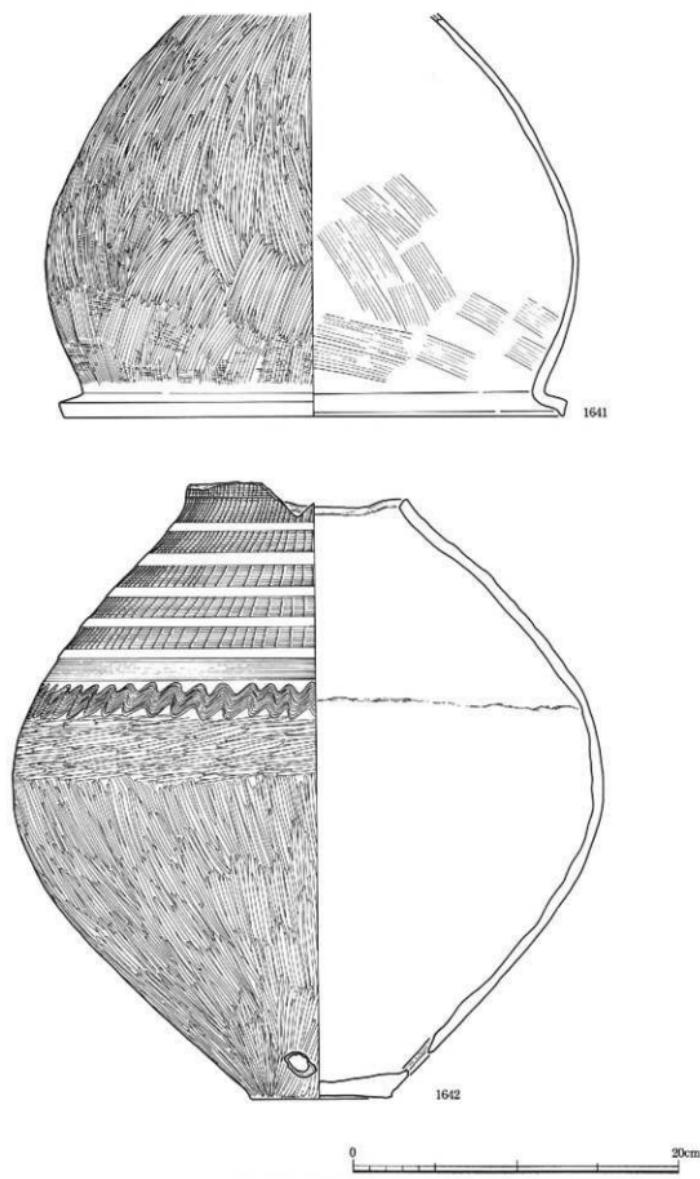


Fig. 268 S X1334出土遺物実測図

S X2235**1. 遺構(Fig.269, PL.36)**

B-2区, C12NQで検出された土器棺墓である。VI層を基盤層としている。検出面の標高は7.4mである。SD2206の西肩付近に位置している。この土器棺墓を検出した周辺区域、すなわちSD2206の西肩を中心とした区域には、調査直前まで送電線の鉄塔が存在していた。このため鉄塔基礎部分によって遺構面が広く破壊され、塔の脚部にあたる部分に4カ所の大きな攪乱坑が存在する。SX2235はこれら攪乱坑の間隙に辛うじて遺存していた。墓墳は一部に損壊を受けていたが、本体部分は無傷であった。墓墳は長径76cm、短径67cm前後の不整椭円形を呈すると考えられる。また深さは40cmで、壁面は底まで掘鉢状に掘削されている。土器棺は壺(1644)を棺身、甕(1643)を棺蓋として合わせ口に組んだもので、墓墳中央部分において棺身を僅かに傾けて設置されていた。棺身の主軸方向はN-8°-Wである。土器棺の上部は削平を受けており、棺蓋の底部は損壊し失われているが、棺身はほぼ完存していた。棺身は肩部以上が意図的に打ち欠きされている。この上に棺蓋の甕が上下逆転して被せられ、壺の最大径部に甕の口縁部がかかり、甕の口縁部は壺の体部とほぼ密着している。いずれもIV様式。墓墳掘形の底と、棺身の底部との間には僅かな間隙がある。

2. 遺物(Fig.270, PL.119)

1643は棺蓋に用いられた甕で、遺構の削平により底部を失っている他は、人為的な穿孔や打ち欠きはみられない。体部上半に最大径があり、下半部はなだらかに径を縮めて平底に至っている。頸部は強く屈曲し、口縁端部は上方に拡張され端面をもつ。体部外面下半は縦方向ケズリ、上半および体部内面はハケ調整が行われている。

1644は棺身に用いられた壺である。肩部より以上はほぼ水平に打ち欠かれているが、それ以下の部分では完全に遺存しており、穿孔などはみられない。平底で倒卵形の体部をもち、最大径は体部の上半に位置している。外面にはミガキが部分的に観察され、内面では上半にハケ調整がみられる。外面には調整以外に加飾などは認められない。

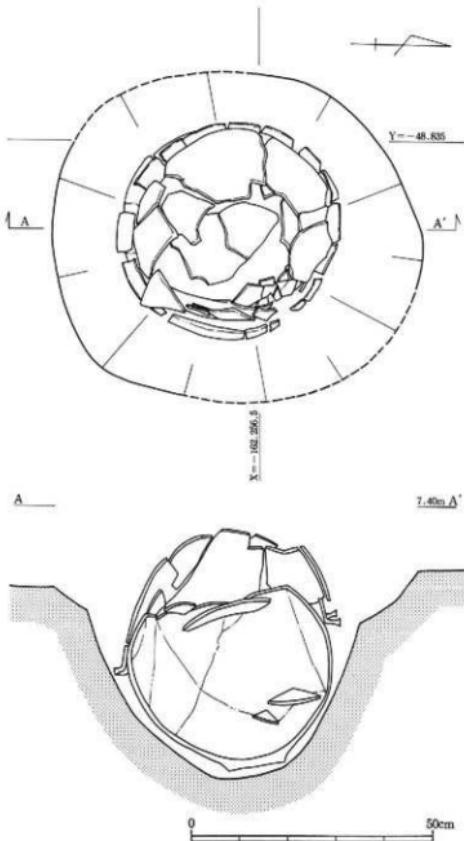


Fig. 269 S X2235平面図・断面見通図

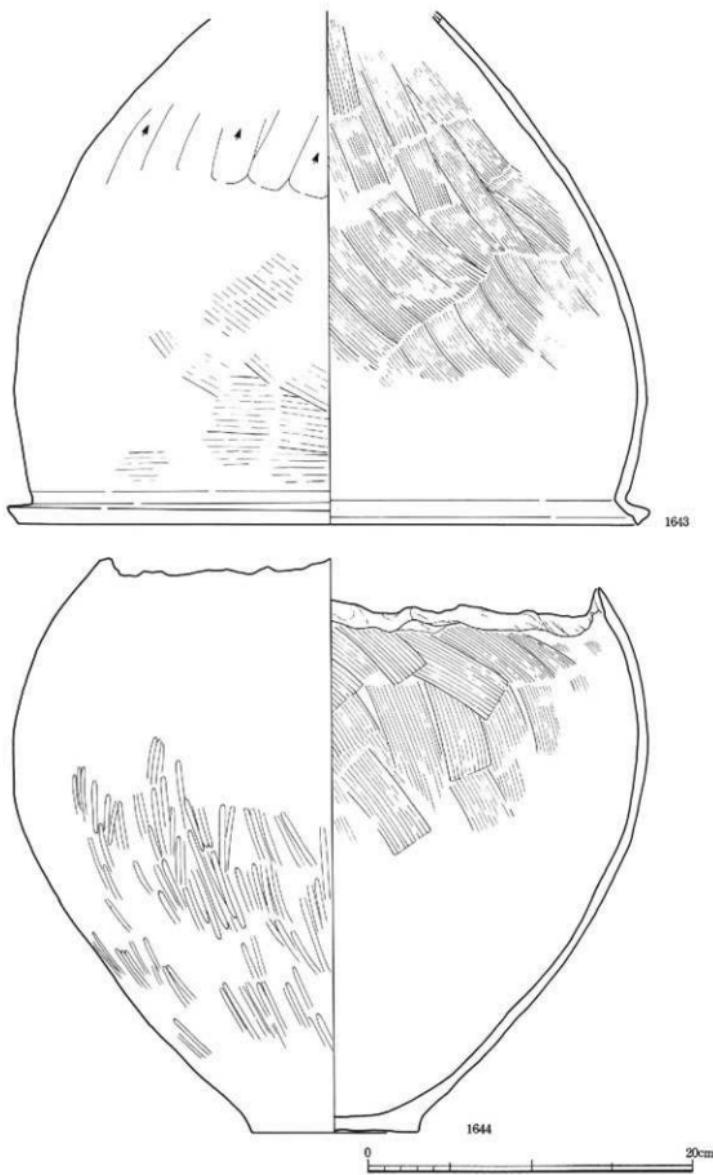


Fig. 270 S X2235出土遺物実測図